後拾遺和歌集

上

特別
へ4
8099
4(1)

へ4
8099
4
(1)

<2001-015>

後拾遺和歌抄序

わか君あめのしたしろしめしてよりこのかた四のうみ浪のこゑ
きこえす九の国みつき物たゆる事なし日の
うちによろつのことをさかりの中に花の色月の秋の
めつる事よりも見てむかしをきゝてかくなむむかしを
ことはよりてちよをさへしのゆくさく月にあさくなり
風のおとむかしをとそなへは花をそへておもはるゝ域の月
たましひの事なりしかは井にありけるあそひのほかまつの小安將
屋まとこの葉あつめさせ拾ふこともなり拾遺集にいらさりし中
此のたゝしるしとの葉をあつめまかきこあつむへきとあつめん

呉羅田文庫

ありけれはおほせをうけたまはりてよみてみる
をうたまはりたる中宮よりハ毎ことにめしてまゐらせ
出るあはせにもかゝりてなむひさしき年をかさねて九月の
の表姫に大臣になりハぬる庭津のそて見れはかし此宴
みな月のはなあはれの出るかひやそかにあはれにさゝれをそなえて
ことはのには海も浦もさけあし抄の見せ給ひ歌を書ならひて
のなりにたのふたまへてちりつくしたる出さめの袋に入中
にいそのかみにすみつることは古今後撰拾遺集にのせて
ひとりものうき波うちなかれうし秋の虫なきさせる毎し
なくなりまゐ毎ちさこそよりおほゆき速と申ころより出る

ることハいまに伝はりまうくつたはれ世中にのこりもてあそふ人さへ
あり天暦のすゑよりこのかたにいたるまて世ハ千つきさかゆきを
つきぬるに百とせあまりを見えあかなしむのよけれ住吉の
松を伝えしむるのうしをすゝめて浪のまさこの数ならぬ
ぬまて家々にもその葉おほくはこれりにかれりぬるをのたすけなる毎
みちすゑるさきのかしこきわさとても代々の浪のま積をと
とくり紀山にもかのいにしへまてもはつてをかしき秋
の月にかゝるにこと葉ちらす表のものあらむあるをハそらさ
二ところ千あまりやかりをえらひてきさまれとせりあつめて
後拾遺和哥抄とつけたりこれは古今後撰よみ人の集に入

たゞうたの道をば世もをさまり人もかしこくて難波津
あさか山の跡をもたどる道はこれより外のそれなり
昔のつかさは梨壺の人と召して宣によりて見えたる歌あつめ
ける大中臣よしのぶ清原元輔源順紀時文坂上もちき
らを撰者とさだめらるゝころをえてくさ道行のやうに
こは歌のおもむきをかんがへ人ならぬこまでの気色をも
として世の世のことおもひなむのかもとおもふに及までもふ
つまりはあるまじきをは人うちとけてあはすまじき事をかはしと
しみつこそ作りをこそとすとむさにいりてちりぬ世の
斧にゐをとらんむ事かたくなしあるべきこゝろはかまへても

見むまでしる吉野河よしとおもひおこさむ人のあるこそは
流る河は流れにしもこの集をえらびたまへることのもとにあり
ならまほしきやまとうたはおのがみならずは万葉集其奏をえらびて
は神の御代より起りて志賀の集なるこゝろを見せて
をそしてまことにいたるまでそのことはりを見ることなしまことあら
かなを殊にして源氏の物がたり延喜のひじりの御代には
万葉集のおほくのうちをえらびて世々にのこして撰ばれて
ゆるはいまの古今和歌集これ也村上のかみのみよには
又古今和歌集にいらざる歌をえらびまことにおほく
後撰集となづく又花山の法皇はさきの二集に

いらはかうえらひいてゝ拾遺集と名つけ侍り
かの宮の集は此ゝ萬葉の古きをくみ心ハうたえしもさも
撰りしこれより大納言公任のみえらひあまりしかの今を
ぬきいてゝ後拾遺の言葉なとをもらし侍らぬいたつらをかれ
にし又千載のもれたるを心の詞をあつめて世に傳へけり
志の能のこゝろにあらさる事ましき事もぬたくはさてこそこま
さきをえらひて物につゝき事にかなへて今の心をゆるさせむ
又九志多乃屋ましうえらひいて人のためまことの我は今
言一巻をあつめて書きかくし集といひけれ
いはへもしくま遠さる中に書き遠たる歌をとりとゝ侍りて

この頃の千載集と名つけ侍るにても今に書かれ
てそのうちに考へつけあるにはかなくこそあれくさの集ハうし
これも少しさても悲しまるも志らきわけしも浮くをかくま遠
乃能を屋の中さらしとせしにて海にて多し又おもて能因法
師といふものありて花乃山のおもと紀貫之にてこそ万葉今は
志るま遠さらぬ世ともひとしくあひたる人のこゝろをえらひそ
言は集と名つけそらし此頃の集よ入る古今歌ハあまたの
まろなえくらかの思しあまりし此ふねきいれ多くさまをもある
遠通ハ此乃集小のとゝ撰りて又うけ心はしき花の集と
いひあり志きれ山本のこゝろまことなるまことのまへなる此

集とはあつめておさむる義、序はしくすゑをしるす也
こゝろあるべしいなばのしわざにもとつ浪文字の出所
つまびらかなり源氏又は山川を太宰をみるに水とゆかり
しる霞み立ちこすゑをのぞみてはるの木とをしる
はるのゆきし花也ハはるまで此集ゐのせかる所は分す
もさゝ浪つらぬる中にこゝろをとらる所中にも玉のまし
きれることはあまたはさらにもはりぬべきことばはいろくのさき
見ことがらの見つるもの清きかれたる紫をもしくの
おほきをそむさかにくしてはなちの霞みをもなき
こゝろくのせかるとは此集をそやつも中たちと

古人あるへ奉はいはれこそかりの言の葉久しくまゐらする也
世々よりも猶志る陸のうらまきくちも暗の大空のはれぬる
をよの道こそえ見鏡くあまたとも道本のまことみえ
ことゝはいまにえるをの志ふはそれ志る所は言の浪なし
かくてあまたくとも世もをぬ様あまたはいかにもつまも
おさけれの空をはせぬすゝ心もまた猶見ことに紙思ひ
てえらるなるとし志るす心は笑人かのことその葉く風
のまへのちりもてひらかれかの玉のよそ紫も霧とこゝろに
えらせぬ人こゝにいるとくすゝめの孫ならん秋なる数
はく孫のはくと志るいつれ此智しいみてまつこともせ

このみ道はおなし末の河のなかれ此道の跡のいさ
よしあしのそのわかちあらそひもありかふたゝびありを
かとハ云へり

後拾遺和歌抄第一

春上

正月一日よみ侍ける　小大君

いかにねておくるあしたにいふことそきのふをこそとけふをことしと

みちのくにゝ侍けるとしの正月一日よみ侍ける　光朝法師母

出てみよいまは霞もたちぬらん春はこれよりすくとこそきけ

春は東より来るといふことをよみ侍りける

源師賢朝臣

あつまりハ名ニこたへ宮もおもしろき物と伴そへつる春風ふきそへはとて人

春立日よミ侍りける　橘俊綱朝臣

逢坂の関をや春もこえつらん音羽の山のけさハかすめる

寛和二年花山院歌合によミ侍りける

大中臣能宣朝臣

春のくる道のしるへハみよしのゝ山にたなひく霞なりけり

やましこもりに山寺に侍りけるに京なる人

のこしして侍りけれハよめる

人しれす入ぬとおもひしかひもなく年も山路をこゆるなりけり

山寺にて正月に雪のふりけるをよめる

平兼盛

雪降て道ふミまとふ山さとにいかにしてかハ春のきつらん

題しらす　加賀左衛門

あたらしき春ハきてとも身にハ年のハかさなる物にそ有ける

天暦三年太政大臣の七十賀し侍りける屏風に

よめる

大中臣能宣朝臣

子日しにしめつる野への姫小松ひかてや千代のかけをまたまし

一条院御時殿上の人々春の歌とて請侍りけれハ

よめる

紫式部

みよし野ハ春のけしきにかすめともむすほゝれたる雪の下草

花山院歌合に霞をよみ侍りける

藤原長能

白河の関をも霞へだてぬに霞のうすき人ハ春になりけり

しらす

藤原隆経朝臣

春きたに野辺の霞の長閑しの霞やかくしつらん

和泉式部

春霞たつやをそきと山川の岩まをくゞる音きこゆなり

鷹司殿の七十賀の月次屏風に臨時

客のところをよめる

赤染衛門

むらさきも朱もみどりもうれしきは春のはじめにきたるなりけり

春臨時客をよめる　小弁

むれてくる大宮人ハ春ことにかはらぬ色をつらねてぞ来る

入道前太政大臣大饗し侍りける屏風に臨時客の

ところをよめる

藤原輔尹朝臣

おもひわけみぎりもうちき八春風にしめふきさえて梅わりけり

同屏風に大饗のところかかれたる所によみ侍りける

入道前太政大臣

君か世を庭のつかひに来まし野のまつすハ千とせや春の人

民部卿泰憲近江守にて侍りける時三井寺にて
歌合し侍りけるによめる
読人しらず
春たちてふる白雪を鶯は花ちりぬとやいそき出らむ
鶯をよみ侍ける
大中臣能宣朝臣
山たかみ雪ふるすにも鶯のいつれの谷に若はふそ嘯なる
正月二日あふさかにてうくひすの声をききてよめる
源兼澄
ふる里へ行人あらはことつてん今日鶯の初音ききつと
選子内親王いつきときこえける時正月三日上達
部あまたまいりて梅の枝をかさしにさして侍けるに内よりもかへりけれは源氏見侍る
読人不知
降つもる雪きえやらぬ山里に春をしらするうくひすの聲
加階申けるに不許侍てうくひすの鳴をききて
侍ける
清原元輔
鶯の鳴ねはかりそきこえける春のいたらぬ人のやとにも
少しはへりける時納言の家にて春山里に人をたつ
ぬといふ心をよめる
藤原範永朝臣

ゆく年の霜も霞にこもりまて春は常よりことにすへき

小野宮太政大臣の家にて子日し侍りけるによみ侍りける　清原元輔

千世へん宿の子日の松をこそよそのためしにひかんとすらめ

題しらす　和泉式部

ひきつれて今日ハ子日の松にまたいま千とせをそ野へに出つる

正月子日庵におりて松をすゑていはひに(?)さし侍けるをみてよめる　よみ人しらす

春の野におふる松のいかなれは千代やとゝりをかさねたるらん

正月子日にあそひて侍りけるに良暹法師のもとより

松のひきはしめもいはゝこそいはれとはしらせて侍らん

かへしもせて日ころ過にしかは讀てつかはしける　賀茂成助

ねは忘いかなる野へに子日してけふのまつをはわするゝなるらん

今上二條におはしまして(?)はしめてさふらひしに中将にてさふらひて子日し侍りけるによみ侍りける

右大臣北方　源経宗女

袖ふれて引とゝまかな小松原いはふ千代のためしにそ見ん

三条院の御時に上達部殿上人なと子日せんとし侍りけるに陽明院女房なとをとりふ物見人にしてしはし侍りてまつり

小まつはゝ花乃ほとよみて新院よりまゐらせ給ける

堀川右大臣

こゝのへの子日の松をけふよりハきみのねなかしよひの合そ

題不知　民部卿經信

あさ緑野へ乃霞のそこひくもけふの小松ともまかせけるかな

承暦二年内裏乃歌合によみ侍りける

左近中将公實

君乃代ハいくよかさねむ子日する松の千とせもかそへつくさぬ哉

正月七日子日にあたりて雪ふり侍けるによめる

伊勢大輔

人ハみな野への小松を引にゆくけふの若菜ハ雪やつむらん

正月子日卯日にあたりて侍けるに

やすく通むねの朝臣のもとにいひつかはしける

うつゑつきつまゝしきハ小まつの子日の若菜なりけり

題しらす　大中臣能宣朝臣

春霞たちのきさ野にいさうらむねみれてなつかしきかな

和泉式部

かすか野ハ雪のみつむとみしかともおひたるものハ若菜なりけり

後冷泉院御時皇后宮歌合によみ侍ける

中原頼成妻

たかよしの人はつらしとも見えさらむ我こそ野のわかななれとも

正月七日周防内侍のもとにつかはしける

藤三位

根芹つむ沢のさなかに年をへてわかなに思ひこそすれ

長楽寺にて故郷霞といふ心をよみ侍りける

大江正言

山高み都の春を見わたせはたゝひとむらの霞なりけり

能因法師

よそ人は霞こめたるものゝ中にも花をみる色なりけり

題しらす

選子内親王

春はまつ霞よりこそ山の端もあらはれそむれ人もなけれは

春のみなとに雨をまちみくみよとの

きける

藤原節信

たなひくと塩屋の塩ちにしるきかな網ひく袖は霞みなりけり

題不知

曽祢好忠

みしまえにつのくみわたるあしのねのひとよのほとに春めきにけり

正月はかりに津の国に侍りける比人のもとにいひつかはしける

能因法師

心あらむ人に見せはや津の国の難波わたりの春のけしきを

題しらす

読人しらす

難波かた浦ふく風に浪たてハつのくむ蘆のみえみみえすみ

春駒をよめる　　　権僧正静圓

あたる野のまくさに荒れしのくなハゝ絶えつゝむ駒ハいとゝ出

長久二年弘徽殿女御歌合し侍けるに春雨をよめる

源兼長

立そめし深き江にあさ緑春雨ハを糸のかけとや友とみるらん

屏風の絵に鳥居のほとりにむまとゝめて旅人の眺望したる

所をよめる　　　藤原長能

かりふしハ行てもみまし付野のなにはのあしのしきて浪晴也

題しらす　　　和泉式部

秋まての霜もしら浪の野に蘆みゆるの根を嫌しと風か

後冷泉院御時后宮歌合に残雪をよめる

藤原範永朝臣

花ならて折まほしきハ難波江のあしのわか葉にふれるしら雪

屏風の絵に梅花ある家にをとこきたる所をよめる

平兼盛

梅の香をたよりの風や吹つらん春めつらしく君かきませる

ある所の歌合に梅をよめる

大中臣能宣朝臣

梅かもよかりにつけてハ夕暮はあたら香く人にあやまたれつゝ

春の夜の雲ハ衣風かしよしハ色をこそ見え何きさる

前大納言公任

たぐひなき色ハ香ハ匂ひしつの花をみ(?)ける

題しらず　　大江嘉言

梅か香を夜半の嵐のふきためて真木の板戸のあくる待ける

村上御時清涼殿の前の紅梅を殿上人によませ給ひけるに
まいりたるよかたをもてよめる

清原元輔

むめの花香はことことに匂はねとうすくこくこそ色はさきけれ

山里にすみ侍けるころ梅花をよめる

読人しらず

わか宿の垣根の梅のうつり香にひとり寝もせぬ心地こそすれ

我宿の梅のたちよる人ハ花よりほかに袖そ香る

題不知

大納言公任

梅のえよふりしほ香ハ一よ世二とひさけの花をえ

和泉式部

春はなほ霞のうちに梅さかハ鶯のなくこゑそきこゆる

山里にて梅をよめる　　賀茂成助

梅花のこと(?)によせてかす(?)の手きさ(?)をなる

春風に梅といふ題をよめる　藤原顕綱朝臣

梅花かをりし雪は香も春の風にこそちりかゝりけれ

梅花を折て讀侍りける　素意法師

梅か枝をおれはつゝれる衣手に思ひもかけぬうつり香そする

大皇太后宮東三条にて后よりたる世にしきの
紅梅をうへしに色まさりて花のさかりに東のおまへの梅の
ていとおもしろくさきたる枝よむへきよしつき侍けり

年のめくみて

かくるとも色はかりとも梅花さくのまさるをおもひいてたる

歌しらす　大江嘉言

春風とゆきぬそらりそむなれもおりとも、かはられぬむ

清基法師

風ふけはをちのかきねの梅の花香はわか宿のものにそ有ける

みちまさの三位の八条の家の障子に人の家に梅
の木ある所あるしのまちて客人来たる所をよめる

藤原經衡

まつ程の人にもみえむ梅花ちらさともしはなれけるむ

水辺梅といふ心を

平經章朝臣

すゑむすふ人の手さへやにほふらん梅の下ゆく水のなかれは

長楽寺にはる人侍りける二月ついたちよ人来れとも
いひつかはしける　上東門院中将

なかしまに霞こめたる浦山の花は山川の春風そふく

題しらす　　小弁

かへるさを秋とみしまにまたとひて見えつるかりも春こそ帰れ

帰雁をよめる　　赤染衛門

かへる雁雲井はるかに成ぬなりまたこむ秋も遠しと思ふに

藤原道信朝臣

ゆく人もさしはまからぬ里ゆへにいつくの春に帰る雁かね

馬内侍

よそにのみつれなきもの人の思ひわたるもかへる雁かね

津守國基

うちわたす人めかく玉章とみゆるはかすかの空にゆく雁の声

弁乳母

なかりしも春まていかにわたりてか雁かねのいかにつらきを見えん

屏風に二月山田うつ所に帰雁のところをよ
み侍ける　　大中臣能宣朝臣

雁かねそ今は帰るを山田もる我そとまりてかへるらん

天暦四年内裏歌合に柳　　坂上望城

あらたまの年をへてもあを柳の糸はいつまて春の千とせそ

柳桃池水といふ題をよめる

藤原経衡

池水はみくさもとらて青柳のはらふしつえにまかせたるかな

読人不知　菅原文忠

あさみとりみたれてなひく青柳の色にそ春の風もみえける

二月はかり良暹法師のもとにみやこをとりにつかはして

いかなる人にて花見にすむいてめつときこえてははや

いそや梅ともとなかしてそのなかはそらしきる

菅原孝善（カミシタノ題）

春霞たつの山にかかりてもそら波ゆくまなのかた

人々花見にゆきてさそのかくとてつきけのこれはかつ

題しらす　藤原隆経朝臣

山桜見にゆくみちをへたつれは人のこころそみえかくれする

きのふきみへもそ見えかへりにけるつかはしたる家

にて梅の花もさかりに誰とも花もそてのしまらせ給きる

皇后宮大夫作

うつやましは山かせとももみちかさらぬ雲の花にはまるる

花見にまかりて山の小諸識野をやきたるをみてよめる

賀茂成助

小萩はら秋まくはらひなかはいそさの野をやきつし春はその

頃しらす　永源法師

ちるをもさくはちりみむしとこそ見しかりにくも風のいとなりけり

中原致時

梅の香を桜乃花ににほはせて柳の枝にさかせてしかな

橘元任

ゆかぬまつ春日野中の桜こそはるかにまかせてみよとなれ

一条院御時殿上の人々花見にまかりて女のもとによ
みつかはしける

源雅通朝臣

をるえおしおりてハゝの山さくらををとこそ西見えにまかせ

中納言
蔵小馬　三条院女蔵人民部丞藤原貞孝女

あしてこかくりけるに桜風にちりけるをみて よめる

後冷泉院御時上のをのこども花見にまかりて歌
みとしけてなりにける一条の院のもとにまかりて侍り
ける

一宮きい

なかしめの心をはなれてもさそふ人もとく散りやハすら
今上御時殿上乃人々花見にまかりてかへりまゐり
てまたの日よみてつかはしける人のもとにて侍りける

右大臣北方

あくかるゝ心はさても山桜ちりなむのちや身にかへるへき

橘子乃家に花見にまかりて山里にひさしく侍ける人のもとにつかはしける

源兼澄

いさかへむと契りし人のなくさめはちるをさくらとさくさかむ

題不知　　祭主輔親

いは道をうちこえて折まし山桜ちらてちれる枝しなけれは

藤原為言

行こまのかへる春はならのきの花よりもあかぬなかめは

羇旅花と以ふ心をよめる

小弁

山桜心のまゝに尋ね来てかへさそ道の程はしらるく

長楽寺に侍りける比斎院より山里の桜はいかにと

ありけれはよみ侍りける

上東門院中将

匂ふらむ花のみやこの恋しさに折に物うき山さくらかな

白河院にて花をみてよみ侍りける

民部卿長家

あつまちの人にとはゝやしら河の関にもかくや花は匂ふと

南殿の桜をみて

前中納言

見るからに名もその君か色はいそきも人まてそ見ゆ

う色のをのこともみゆる人侍りける小春に寄花

といふ事をよみ侍りける　　大弐実政

春ことにみるとはすれと桜花あかぬ心もまたはけられぬかな

惜花心をよめる

大中臣能宣朝臣

ゆくもまかふ名残おしむ心さへ人をおくなかれゆかんかな

河原院にて人々あまた山桜を見てよめる

平兼盛

道とほみ行てはみねとゆくもちるをたつねつる宿の色かな

我思桜と心をよせつる

能因法師

桜さく春は夜をなすらせハ篝にも物ハ哀れゆかまし

さくら花色をたにくれなゐにみせかれて

よめる

よみ人しらす

桜さく人の家宿の行て花を見る人はかへる行かな

遠所にまかりて人のもとに山の桜を見てよめる

和泉式部

桜人いつとも見ゆるみちせんの山さくら一えたも折りなむ

題しらす

人も見ぬ宿に行くとも色これ花見て見れはもとかれ

ひとり宿の桜をみもあかすともわかぬかれ人のこゝろみれ

道命法師

花見にと人は山色に入まても春をたにこそとりかへす

紫式部

世中をなにかけるらしも山はかくて花みかねつるのやなりせは

なけりしきみしと仰ける法花ツとみてよめる

藤原正経朝臣

むかくれ方わかにこゝはとしのはるかなる人のおもひのみやこかはらぬ

堀河右大臣九条家にて毎山春ありといふ題を

見侍りて

前中納言顕基

我宿にすきはけりとみけにはなかる山たに春はきにけり

藤原元真

題しらす

おもひつゝ暮にし人のさくらをたにあはれの春はかりは

長暦二年内裏歌合によめる

右大弁通俊

春の中は散る桜と見てしかなやむ風のさくらかせ花と

屏風に桜宮見花といへる心をよめる

平兼盛

花みると家路に遅くかへるかなまつらし花にまよひてはいかに

屏風の絵に三月花の見むとて前に宮人集れる所

一年中にていそこぬ春なれはおもふ花とこそみれ

後冷泉院東宮と申ける時上のこころをもとに

と云題よまれける読てたまはりける

良暹法師

ふるさとの春の都にまかりてもとの花とみえける人

通宗朝臣能登守にて侍ける時国にて哥合し

侍りけるによめる　　源縁法師

山さくら白雲にのみまかへはや春の心のそらになるらん

宇治前太政大臣花見侍りけるによませ侍りける(?)

民部卿経信

いにしへの花見し人は尋ねしを老は春にも志られさり

けりしも三年まてはありくましかりしに(?)

と三月ころに白河わたりの花を見侍りてさう(?)こ

のちとはかくもありけるをとおもひて世をそむき侍るとて(?)

よめる

中納言定頼

桜花さく色にはまつて春の心むつかしき(?) [illegible]

遠花誰家といふ心をよめる

坂上定成

よそなからをしき桜のにほひかな誰わか宿の花と見るらん

毎年見花といふ心をよめる

源縁法師　任越後国之時号越之宗(?)

春ことにあふともあかぬ深山桜心してやは花の咲くらん(?)

賀陽院の花さかりに忍ひて東おもての山の花見

にまかりて侍りけるに宇治前太政大臣ききつけてこの

程いかなる哥かよみたるとといはせて侍りけれは久しく田舎に

年経てさる道家歌合とも見侍りけるにまかりける
出そて読侍ける　　　　能因法師
世中をおもひすてつる身なれとも心よはしと花にみえぬる
花をきゝて太政大臣のもとにありけるとよひてかつき
物めつらしく侍りけるとよむといひけるよみ侍ける
春はよ由ありてくるきみはいまゝてきゝし桜のあるしの
みこそといひ出て範永朝臣のもとにつかはしける
代々をへて我つかへこし桜をや若木の桜とはちらして侍
高倉の一宮の女房花見に白河にまかりけるに
よみ侍ける　　　　伊賀少将
あふ事を春れるみ人に見えましかは花の夢をもたのみせまし
内のおほいまうちきみの家にて人々さけたうへて歌よ
み侍りけるに遥に山桜を望むといふ心をよめる
高砂のをのへの桜さきにけりとやまの霞たゝすもあらなん
　　　　大江匡房朝臣
遠山桜といふ心をよめる
　　　　藤原清家
吉野山八重たつ峰の白雲にかさねてみゆる花さくらかな
周防に由ありてくたらむとしけるに家の花をたむけしも
花を人々よみ侍けるによめる

藤原通宗朝臣

たのひとくちてまちし庭桜ちりての後そ風ふきてみれは

花の下にしゐてむすひてすゑといふ心をよめる

良暹法師

とふ人も宿にはあらしやま桜ちりてのちこそまたるへけれ

基長(仲イ)中納言東山に花見侍りけるにねの秋きこえ

法師して歌ともよませていはせ侍りける

加賀左衛門

散まては桜狩をせしも末なりとみえたる花の名そなき

東三條院御屏風に桜人の山桜をみる所をよめる

源道済

ちりはてゝのちやかへらむふるさともわすられぬへき山さくらかな

たかしきに法の屏風の絵にはけふの花散くさけ

所よ人くるあたりをよめる

わか宿にうゑてみけるかな桜をもかりにはきねもおもふらしとそ思

大納言公任花のころかへりしときゝてつかはし侍

さりけれは

中務卿具平親王

花もみなちりなむのちはわか宿になにゝつけてか人をまたまし

後拾遺和歌抄第二

春下　三十七首

三月三日もゝの花を御覧して　　花山院御製

三千世へてなりける物をなとてかは桃としもはた名つけそめけん

天暦御時の御屏風に桃花ある所をよめる

清原元輔

わかやとは八千代まてかさせ桃のこの花ものこらし春しらぬとは

世尊寺のもゝの花をよみ侍りける

いてはの弁

ふるさとの花の物いふ世なりせはいかにむかしのことをとはまし

永承五年六月祐子内親王家歌合し侍けるに

三月中に花題を人〻よみ侍りけるによめる

堀河右大臣

ゆくるもあかぬほとにちるはなをおしむ涙は人やおしまし

題しらす　　内大臣

おしめともとまらぬ花のよそに春は山風を傾(さくら)

天徳四年歌合に　　平兼盛

もゝしきにうつしてうゑしさくらもわかのなかはいはれたなかへき

大中臣能宣朝臣

さくら花まきくなちりそ春をはあきにかはしむかなよ

屏風の絵にゆく人の花のちりかゝるところある所をよみ侍りける　源道済

山里にちりはてぬへき花ゆへに誰とはなくて人そまたるゝ

大弐資通の庵にて侍りける事にしらしめ伊勢国に下て侍りけるにいまはにさのかのことかの家人もなくてさくらいとたかくちりけれはたちこもりてよみ侍りける　右大弁通俊

志めゆひしそのかみならは桜をしまれつゝやいまはちらまし

山路落花をよめる　橘成元

桜花みちみえぬまてちりにけりいかゝはすへき志賀の山こえ

陳花をよめる　坂上定成

ゆくちるのさかりにしてふく風はもる花宿そわかれまさる

花の庭にちりて侍りけるに雨ふりくれによめる　清原元輔

ものゝけさゆくあしきさらしに錦をはゆかは庭とみて

承暦二年内裏後番の哥合に桜をよみ侍る　藤原通宗朝臣

おしむにはちりもこそすれて桜花あかぬこゝろにのこりけり

題しらす　永源法師

なかなかに枕をとれなる人山にいりて京の旅こそ世はちりぬるみましや
三月ころほひに花のちりけるを見てよみ侍ける
右衛門督通殿
うき世にはいかなる色のちりにくもりしもあらしと世にはなれぬ
永承五年六月五日祐子内親王の家にて歌合し侍けるによめる
大弐三位
吹風そおもへはつらき桜花心とちれる春しなけれは
題しらす
中納言定頼
年を経て花に心をくたくかなおしむにとまる春はなけれと
家の桜花ちりて水にうかひけるをよめる
大江よしとき
ちるをみぬ人もみよとて桜色の水にまかせて池に見る
白河にすむ花のちりて流れけるを人に侍る
右衛門督右大臣 師房
ゆく末も花はとめてや白河の水とともにそ春はゆくらん
ある右大臣の家にて人々おしむの花を惜しみ侍る
心をよめる
藤原ためとき
とまれとも嘆くへきかな花ゆへにとなりてもとまらぬもいふかひ
庭に桜のおほくちりて侍けるによめる
和泉式部

風ふけはさそな庭桜ちるとも春は見えましものを

三月ころ小野の花見に侍りける

藤原義孝

聖のすまひ庵よいの月あかまて雨さそふやさしき外

はくしとよめる

和泉式部

忘れてしおりにそみかせこのきみつ紅そめし色にはにほへは

藤原義孝

春花のこの紅そめし色と見えくるなつさき花のさくにしくるか

月の帰といふ前に雨ふりてけるすゝけ東方なるみ

庭の花をちらさてあそひしよみ侍ける

大中臣能宣朝臣

花のちれはかりと春過ぬれは庭のねはふにこそけふは波そたつなる

題不知

読人不知

岩ねの底しらぬそあさくら花の大池にかひさえ雨かそ花のなる

源為善朝臣

春花ちりての池をはにしきともみゆるかなひとつのやそたる人

長暦二年内裏歌合に藤花をよめる

大納言實季

水底もむらさきふかくみゆるかな岩垣沼にかゝる藤波

民部卿泰憲あふみのかみに侍りける時三井寺にて歌合

住吉まうての小藤花を見侍りける

すみのえの松のみとりも藤の花かけてそかへるきしの春かな

読人しらず

題しらす

藤原範永朝臣

たゝ井手の里もむかしに色もやは八重さくらん山吹の花

大弐高遠

沢水にかはつなくなり山吹のうつろふかけやそこに見ゆらん

長久二年弘徽殿女御家歌合に蛙をよめる

良暹法師

みかくれてすたく蛙のもろ声にさはきそわたる井手の浮草

題しらす

藤原長能

春のゆく道にきむかへ時鳥かたらふ声にたちやとまると

清範律師道命法師なと侍りける家にてよもすから語らひはへりて暁に帰るとてよめる

増基法師

我宿にきくはいかなる呼子鳥三月晦日まてたつねきつらん

三月晦日に時鳥のなきけるをききてよみ侍りける

中納言定頼

郭公まつにはいかてきかれぬに惜しむ春をはすきてゆくらむ

三月晦日春をおしむ心を人々によませ侍りけるによめる

志賀にまかりて藤花をよみ侍ける

読人しらす

すみのえの松のみとりも紫の色にてかゝる岸の藤なみ

題しらす　藤原業遠

たちかへり井手の山吹今しこそ八重もいさらぬ山ふきの花

大貳資通

沢水にかはつなくなるも色しけれ岸の山吹さかりなるらん

長久二年弘徽殿女御家歌合に蛙をよめる

良暹法師

みかくれてすたく蛙のもろ声にさはきそわたる井手の萍

題不知　藤原長能

聲すてゝ浅のつまさへあるをほとゝきすはなれて来なく春にもあるかな

法輪に道命法師侍けるにまかりてひさしう侍らさりける

我よろこひなきかれにおくれ侍けれハよめる

源縁法師

我やとりきくかひなるは呼子鳥二声まてそなかせ給まし

三月晦日に時鳥のなきけるをきゝてよみ侍ける

中納言定頼

郭公おもひもかけぬ春なけはことしそまたて初音きゝつる

三月晦日春をおしむこゝろを人々よみ侍けるによめる

大中臣能宣朝臣

暮るゝをも春はいかにてとゝまらぬ春をもしくる人

三月尽日おやのもとにまかりてよめる

永源法師

なかしまたあはぬこゝろのけさ野辺の春の夜又春にたちかへるへきかな

後拾遺和歌抄第三

夏 七十首

四月のついたち日よめる

和泉式部

桜色にそめし衣をぬきかへて山ほとゝきすけふよりそまつ

四月一日時鳥をまつこゝろをよめる

藤原明衡朝臣

こゝにまたわかみしものをとつ里にまちてなれぬ郭公かな

津の国のこやへといふ所にてよめる

能因法師

わか宿のこすゑハ夏になる時ハいこまの山そみえすなりぬる

冷泉院春宮と申ける時百首哥奉りける中に

源重之

夏草ハむすふ計になりにけり野かひし駒もあくかれぬへし

題しらす　　そねのよしたゝ

榊とる卯月になれハ神山のならの葉かしハもとつはもなし

山里のくゐなをよみ侍りける

大中臣輔親

風人のむらむれの花ハ宿さふに清(?)やまのこ(?)戸をたゝく水鶏そ

山家卯花をよみ侍ける

藤原通宗朝臣

ゆきとてくらふ人もなき山里ハ我のミこそみるらんさける卯花

民部卿泰憲あふミのかミにて侍りける時三井寺にて哥合し侍けるに卯花をよみ侍ける

読人しらす

しら波のよせてかへるとみゆるハ卯花さける垣ねなりけり

題しらす

月影をいろにてさける卯花ハあけハ有明の心ちこそせめ

或所の哥合に卯花をよみ侍ける

大中臣能宣朝臣

卯花のさけるあたりハ時ならぬ雪ふる里のかきねとそみる

これて文治もとて白妙の卯花さけり屏風にみえ侍

正子内親王の絵合し侍りけるに歌によみ侍る

清の元

見わたせハ浪のしからみかけてけり卯花さける玉川のさと

伴勝太輔

うの花のさけるあたりハ白浪のたちこそ流の井手の玉川

卯花をよみ侍る　源道済（セイ）

雪とのみあやまたれつゝ卯花もさきにけりとみゆる山里

住ての大山寺とふ前にて合し侍りけるによめる

元慶法師

ふるさとのかきねにすれと時ならぬいつまの雪と見えし卯花

読不知

卯花ハまさきにさけるかきねとてたちよりてみる人もなき

慶範法師

夕月の清にこそ見ゆれ卯花のかきねのさとに郭公なく

まかりて侍りける秋の来るまて卯花の侍りけれハ

城河右大臣

時ならぬ雪かとそみる卯花のさかりの宿はとふ人もなし

道命法師　山寺にすみ侍りけるにほとゝきすを

藤原高遠

加賀守　仲

さくはなのちりしきをかしらの山郭公いかになくらん

題しらず　　道命法師

あし曳の山ほとゝぎす波のこゑなからし大こゝ島の聲をきかまし

禎子内親王賀茂のいつきにておはしましける時女房あまた侍りけるを年ごろ後三條院内親王院に侍りける

かくのみたにむかしを思ひてまうでのさきの日又

よみつかはしける　　皇后宮美作

きゝしにもかはらぬ神山の郭公あまたむかしおもひしかな

まつりのつかひにてかむたちにとまりたる人のもとにおもひて

こゑをきくよとてをとこに侍りけるを大納言長房みて侍りけるを

またはなかりしをきゝて　　備前典侍

郭公なのりしてこそしらるなれたつぬる人につけやゝらまし

四月ころありあけの中にかゝりけるをきゝてなむ

きゝけるに人のとはむをとこにはつけゝれは

大中臣能宣朝臣

夢さめて君がよの人郭公聲は我が山ちかくこゝろ

いかなる人をまちける事侍りける時郭公をきゝて

よめる　　増基法師

二声は我てのみきく郭公こゑしのびつゝ聲のかなしき世よ

題しらず　　橘資成

霞のたつ由とゝめぬまに(?)すぎてきゝてかへりて廿六

永承六年五月五日祐子内親王家歌合によめる

伊勢大輔

いつとても来ぬの比ともおもほえず郭公あかずとぞおもふ次さまの一声

能因法師

我やどにあけは鳴きてきゝし郭公杜のかげに鳴く也

夏の夜はさてもや郭公かたらひきゝて二声きける人やなからん

藤原兼房朝臣

小弁

郭公来てこそきけのまつ郭公まだきく声も一声ぞ

祐子内親王家にて歌合し侍りけるに題をかへて
のちに人々たれかれ題をよみ侍る

宇治前太政大臣

有明の月にも郭公一声のゆくかたも見ん人ぞ

宇治前太政大臣三十講後歌合に郭公を
よめる

赤染衛門

寝ぬ夜もなく夜はに鳴くなる郭公待えてや又我のみぞきく

題しらず

待ちわびて夜半に鳴くなる郭公まつ人もなき我がやどにきけ

大江公資朝臣

郭公をまちてよめる

おのつから思ひ出なむほとゝきすいかにしてこの世におもはむ一声

郭公を聞てよめる　法橋忠命

きてきゝやまた(?)人もなかりけり(?)時鳥のねをあそふるらしけり

長保五年五月十五日入道左大臣家歌合に遠郭公といふ心を　大江嘉言

いつしかときゝつる今日はほとゝきすたゝ一こゑのおほつかなさよ

五月をやりにし未深山の木の下にまつらめ

道命法師

郭公まつにかひなき一声もたゝにきてこそあかつきにまれなる思ひなりけれ

ほとゝきす深山のおくにこゑをそきかてそ物思ふ人のかはらぬ秋たえ

郭公をまちて山寺に侍けるほとゝきすを

きゝてよめる　律師長済

一声もきゝてかへりしほとゝきすこゝろやすくも夜をあかしけり

時鳥をよめる　能因法師

明くるさへきなかぬよひのしるしには秋のよはにもひとりあかしつ

大弐三位

まちぬ秋もまたの夜しきりのみなる花さくらもむなしき白雲

小弁

ほとゝきすのやくいまつらむ郭公物思ふ屋にはきつる秋はなき

早苗をよめる　菅原孝標女

みやこには卯月にかはりけりいさはやまた早苗とりもそへられね

永承六年五月殿上の根合に早苗をよめる

藤原隆資

五月雨に日も重なりぬたはかりも山田のさなへとりもはてぬに

宇治前太政大臣の家にて三十講の後歌合し侍りけるに

五月雨をよめる

相模

さみだれはみつのみまきのまこも草かりほすひまもあらしとそ思ふ

宮内卿経長か山庄にて五月雨をよみ侍る

藤原範永朝臣

五月雨はみえしをさゝの原もなしあさかのぬまの心ちのみして

橘俊綱朝臣

はやくしまたきはぬれは五月雨のまもやかたしくみゆるかな

題しらす

能因法師

五月雨にをやむけしきのみえぬかなみつのこゝろにとほしはりつゝ

五月はかりはしめける所にまかりてよみ侍りける

恵慶法師

あさかとてうらひとのあやめをあやめ草ねやゝさすらん駒のすさめぬ

永承六年五月五日殿上の根合によめる

良暹法師

たくさしの庭のあやめをよそにみてたけのあやめも根ふかくそある

左近中将に侍ける時歌合し侍けるによめる

大中臣輔弘

霞の衣に袖さしてかよふ春やよ若菜つみひくもあるらしとのを

小一条院東宮におはしましける時大嘗会の年

の正月一日によめる　　伊勢大輔

今日を春あやしきもおなじ色なかりける君が千年と思ひかねつね

花をよめる　　　清少納言

春の夜の風なくして見る花ぞさらに花に風やさそふらん

大弐高遠

昔見しきみは色ぞかはりせば身もつれなくも思ひしるへき

鶯をよみ侍ける　　源重之

若もせてわかしみそめし鶯ぞふかくもしるく春なりきれ

宇治前太政大臣三十講の後歌合し侍けるによめる

藤原良経朝臣

池水に汀の桜ちりしきて波の花こそさかりなりけれ

題しらす　　能因法師

ひとたびの蛙の羽衣はなれうすくこそなけれつつなきけれ

源重之

春ごとに花のにほひをとめ見てこそ見し人ぞなき

曾禰好忠

夏衣たちて河原の柳かけすゝしき人よりくるゝ浪のよる
ひもろきよめつ　源頼実
夜の月よそにするまて涼ぬ冬秋の風やふきぬらん
夜秋月といふ心をよみ侍りける
右衛門大臣
夏の夜の月をかりて入ぬとも尾花かすゝ秋の新はとゝめん
大貳資通
かはとはいかに思ひしとなき玉まひかけぬ夜の秋のは月
宇治前太政大臣家に三十講の後歌合侍りけるによ
よみ人侍りける
民部卿長家

夏衣袖も涼しくなりぬれは庭さへ秋の露とみえける
中納言定頼
ここたくの花白妙の庭はかゝる園よりさそふ錦もなしと見え
道済の家にまかりて雲の来ここたくの花を思ふといふ心をよめる
能因法師
いかなれはかの庵にここ夜は秋風たち露の玉そきえけるかな
題しらす
菅孫女忠
きそみよりいもの家ちにつきそらし思ひかねつここ夜半のあき
平兼盛
夜ふけくなりそよけのさかりに秋のさく草むらにて人の

夜乃涼しき心をよみ侍ける

堀河右大臣

かくはかり夏はすゝしく成ぬるハ人よりさきに秋やきぬらん

今の夜ふかき月をよみ侍ける

同大臣

夏乃夜更ぬる月をみるまに松に吹来る浪風そ涼しき

ひさかたの月の影にそ吹風も秋とハ聞ゆるを

よみ侍ける

源顕綱朝臣

夕山のすそ野の草もそよく夕暮ハことしも秋の心ちこそすれ

屏風の絵に夏のすゑよそなる山に秋かく成たる所

所をよめる

大中臣能宣朝臣

篠葉をはかなくたちむすひて山姫まかせの袖ふれぬれ

鈴声入夜寒といふ心をよみ侍ける

源師賢朝臣

さ夜ふかき岩井の水の音きけハむすはぬ袖もすゝしかりけり

六月のつこもりを詠る

伊勢大輔

水上もあらふる神のみそきかは浪もたちそひ秋そ近え

後拾遺和歌抄第四

秋上

秋立日よめる　　読人不知

うちつけにたもと涼しくおほゆるは衣に秋はきたるなりけり

　　　　恵慶法師

あさち原玉まく葛のうら風のうらかなしかる秋は来にけり

扇の歌よみ侍りけるに　　藤原為頼朝臣

おほかたの秋くるからに身にちかくならす扇の風そかはれる

七月六日よめる　　小弁

一とせを過しつるよりも七夕のこよひをいかにあかしかぬらん

七月七日庚申にあたりて侍りけるによめる　　大江佐経

いとゝしく露けかるらん七夕のねぬよにあへる天の羽衣

七月七日よめる　　小左近

七夕はあさひく糸のみたれつゝとくとやけふの暮をまつらん

七月七日宇治前太政大臣賀陽院家にて人々酒たうへてあそひけるに牽牛(ヨリ)女言志(ミヽニ)をと読侍る

　　　　堀川右大臣

七夕は雲の衣をひきかさねかへさてぬるやこよひなるらん

七月七日かちの葉にかきつけ侍りける

上総乳母

天河とわたる舟のかちの葉に思ふ事をもかきつくるかな

長能家にて七夕をよみける

能因法師

秋の夜の[illegible]とは黒髪の[illegible]

七月七日よめる

橘元任

織女はあふ[illegible]いつもくもる月[illegible]の七日なる世は

右大将通房

[illegible]七夕[illegible]たなはたの[illegible]

七月七日[illegible]事のけても[illegible]侍りけれは[illegible]

えりける

新左衛門

[illegible]人[illegible]天河いまは[illegible]星[illegible]

七月七日風[illegible]吹て[illegible]七夕まつりのまうけ[illegible]

こまをて八日まてありける[illegible]

よみける

小弁

たなはたの舟[illegible]七夕[illegible]

居（キヨ）貞親王（ユタ）青山[illegible]

藤原家経朝臣

いにしへも秋ハ来つれと遠山里にハ清かなるらん秋の月かけ
容依月来といふ題を上のをのこともよみ侍けるに
よめる　　左近中将公實
思ひし人もとはぬ秋の夜ハ月出るとそ待人のきぬ　まイ
花山院春宮と申ける時昭陽殿におはしまして
秋月をよせてあそひ侍りける夜よみ侍りける
大貳高遠
秋の夜の月見まほしく秋ハ心も我もなくさめかねつらてあはさん
三条太政大臣たかきをかしこまりて前栽植侍し家に
古きなる老十六人をえらひて歌読侍りける中に秋

月といふ題をよみ侍ける　　平兼盛
めくりあふ世をかさねてもむかしなからの秋の夜の月
土御門右大臣家に歌合し侍けるに秋月をよめる
源為善朝臣
大空の月の光てあかつきハ荒たる宿の板戸も秋ハ清き遠波
河原院にてよみ侍ける
恵慶法師
すたきけん昔の人もなき宿にたゝ影するハ秋のよの月
題不知
永源法師
身をすてゝ清みのふねにまかせても秋の月山のはなれぬ人もまたれぬ

荒人のかよひての姫亀殿の月をまてあさこそいりて見
侍ける　源道済
よもすがら昔も上ゆくみる時も秋の月にはあかすそ有けれ
寛和元年八月十日内裏歌合によみ侍ける
藤原長能
いにしへもみる月ごとに秋の来はいかなる影をそふるなるらん
八月十五夜月もくまなく侍けるをよめる
前大納言公任
とゝむれといくせへぬらん世中にくもりなき月の雲居
いりさへの月をみてよめる

藤原範永朝臣
すむ人もなき山里の秋の月はひかりもさびしかりけり
山寺に侍けるころ人のまうできて侍けるによめる
素意法師
こふ人もなき秋の山里にたゝひとりすむ秋よみし月
読人不知
藤原国行
白妙の衣の袖を霜かとて払へば月のひかりなりけり
八月十五夜によめる
堀宗為経
いにしへの月かゝりせはかつらぎの神は夜とも契らさらまし
堀河右大臣

飛ていすゝろ虫とむ月かけをかゝるも道ハ秋ハゐくへ所も志られ行

藤原隆成

うきよにハいとゝ身をわすれてかゝる道ハ見えてなきを秋の夜の月

赤染衛門

人ハ秋を世にあるの人ハいかにさまれいたくやなく月かけとみるらん

題しらす　よみ人志らす

秋の野をおもひしことし秋の月あもてにさへみちかき夜のこゝろ見え

或人云かの陽関にて八月十五夜の月をなかめ行わかつきよ

宇治前太政大臣のよゝけ道ハ小式部法師

よみ人物きりといひ侍り

清原元輔

多くの花の色をさく見えれば世にさまむしの声そきこゆる

よもすから虫の声をきゝてよめる　大江匡衡朝臣

うき里こそ我てあはれ志くなる霜れ人をとふ虫の音哉

前大納言公任

ふる里のあれの秋にもあらぬ露のなかにまくにしけまきれた

二条中宮

ありありても人をもたのむ年をへて我かなしかゝる絵むしのこゑ

長恨歌の絵に玄宗もとの所に帰りて虫とも

なき草もかれわたりて御門なけき給へるかたある所

とよみける

道命法師

さえわたる月の京と思ひてもきてきくむしの声ぞかなしき

詠不知

平兼盛

浅茅生の秋の夕暮なく虫ハ我ことしたに物やかなしき

大江匡衡朝臣

秋風に声よハりゆく鈴虫のつゐにハいかゝならんとすらん

曽祢好忠

なけやなけ蓬の杣のきり〳〵す過ゆく秋ハけにそかなしき

寛和元年八月十日内裏歌合によめる

藤原長能

わきもこかかけてまつらん玉章をかきつらねたる初雁のこゑ

久しく見えぬ人の許に雁の鳴をきゝてよめる

赤染衛門

おきもゐぬ我とこよこそかなしけれ春かへりにし雁も鳴也

後冷泉院御時后宮歌合によめる

伊勢大輔

さ夜ふかく旅の空にて鳴かりハをのか羽風や夜さむなるらん

八月はかりに殿上のをのこともをめして歌よませ

給ひけるに旅中聞雁といふ心を

今上御製

行てゆく道もわすれて駒をみきこゆるさへにまよひぬる

八月に駒迎をよめる　　良暹法師

あふ坂の杉のむらたちひくかえをよそにみゆるもち月の駒

源縁法師

みちのくのあさちの駒もなつめともけふあふ坂の関まてはきぬ

屏風の絵に駒迎しくる所をよみ侍りける

恵慶法師

もち月の駒ひくときは相坂の木のしたやみもみえすそありける

禅林寺に人々まうてゝ山家秋晩といふ心をよみ侍りける

源頼家朝臣

蓬生はあさちか原の荒風にたえす麻しくおもひそ増る

公基朝臣丹後守にて侍りける時国にて歌合し侍りけるに鹿をよめる

とくさき　三条太政大臣女号源中納言若狭　丹後

鹿の音に秋をしるなるへしいつかたも野への秋なれはよそにみしかな

藤原盛経鹿といふ心を　　今上 御製

さもあれはさらぬみたれ秋の色にたちもえすゆく萩の下露は

山里に鹿をきゝてよめる

大中臣能宣朝臣

秋はなほ咲わたしもなく鹿の鳴うつろふ花はいとゝ春かな

宇治前太政大臣家歌合によみ侍ける

行してゆく道もわすれて霧分にきこゆるこゑそ露

八月に駒迎をよめる　　良暹法師

あふ坂の杉のむらたちひくほとはをふちにみゆる望月の駒

源縁法師

みちのくのあたちの駒もなつめともけふあふ坂の関まてはきぬ

屏風の絵に駒迎しくる所をよみ侍りける

恵慶法師

もち月の駒ひくときは逢坂の木のしたやみもみえすなりけり

禅林寺に人々まかりて山家秋晩といふ心をよみ侍りける

源頼家朝臣

暮ゆけはあさちか原の虫のねも尾上の鹿も声たてつなり

公基朝臣丹後守にて侍りける時国にて歌合し侍りける

鹿をよめる

さくさき

三条太政大臣女房　号源中納言　散位源兼範女

鹿の音に秋をしるかな高砂の尾上の松はみとりなれとも

萩盛待鹿といふ心を

今上

御製

乃もあれはちらしされはさを鹿の立ならすらむ萩のおきは

山里に鹿をきゝてよめる

大中臣能宣朝臣

秋萩の咲ぬらしもしかの鳴うつろふ花はをのかつまかも

太政大臣家歌合によみ侍りける

七二 源為善朝臣

あさ麻をこゝろ見人もなき麻乃葉を結ひて袖のまつる(?)つら

歌しらす

安法々師

籬なる麻の秋の葉に紫のみちそ三段に生ふる麻を吹なる

能因法師

秋ハ今我身ならねと高砂の尾上の麻も書そへにけり

夜宿野亭といふ心をよめる

覺覚法師

く来て麻の葉ちらくさこ夜半一やそて垣ねハ秋の野なれ

歌不知

藤原長能

玄堆雅に書よふハ麻そさけなるせはの蔭か家や宿りけ

祐子内親王家歌合によみ人侍りける

大貳三位

秋霧の立ぬる宿にいる麻ハおほはりそ人めしる道

藤原家經朝臣

麻乃手にそ摘る夕ぬの家よからふなるを草なる露やとらん

江侍従

きり山さらとちとみる夕霧ハいつさ海とまそ乃鹿そ啼なる

歌しらす

和泉式部

よ移きそのこ花そうなる秋さりハ宿のうらに今田やあらん

天台座主源心

おりみれは衣をむしと思ふらん宿の萩はちりにけるまて

物語事ありける所に萩をみてよめる

伊勢大輔

おきあかし見つゝなかむる萩の上の露吹みたる秋の夜の風

みなとゝ海前栽をさくとてよめる

能因法師

おもふことなけれとぬれぬ我袖はうたてある野への萩の露かな

新左衛門

萩の枝ろに露のをきけるを人く袂にのみ見るよしもかな

まこよいは移ろふ萩のかたみとて衣よそそそ露にこそぬれ

おなし心をよみ侍りける

中納言女王 関白家女房

人恋ふる袖をやなかに秋萩の枝にかゝれる露そこほるゝ

八月つこもりの小萩の枝につけて今なそにほふるらん

和泉式部

浪あらふ中はなくともにも露をそへ萩の色とそふらん

はるかなる人の宿は見ゆとも侍らん比おもしくそなく

侍ける萩と申ありしかたの侍てそ世にけ萩はふか

りそしけり

筑前乳母 上東門院尾張イ

しら露もこゝをそや思ふらんおしもこそ萩は宿の秋と見

萩乃花ちるを人のをしみけれはよめる

橘則長

をく露よたまにもぬける萩をいかにせむかせよれ秋萩

題しらす

源時綱

をかりてあまたの宿にあさちふにみたるゝ秋の夕暮

藤原通宗朝臣

秋風に下葉やさむくなりぬらん小萩かはらにうつら鳴なり

草むらの露をよみ侍ける

藤原範永朝臣

今朝きつる野原の露に我ぬれぬうつりやしぬる萩の花すり

世をそむきてのちいはくらといふ所にすみ侍けるによめる

素意法師

いとはれぬ萩のあさ露わけゆけは恋せし袖のむかしなりけり

題不知

藤原長能

けさみれはのすくさらの末葉もをれぬはかりもおける露哉

寛和元年八月七日内裏歌合によみ侍りける

橘為善(義イ)朝臣

いかにしてたまにもぬかむ夕されは萩の葉わけにむすほ(とけかイ)ふしら露

題しらす

良暹法師

袖ふれは露こほれけり秋の野はまくり(ユイ)てにてそ行へかりける

土御門右大臣家哥合によめる

源親範

嵯峨の野は秋くさ花もちりにけりにほひてきゝし人哉

秋前栽の中にしをりぬて酒たうへて世中はつねなき（さよ）

事なとよみて侍る

大中臣能宣朝臣

草むらに人もなしとて花もありけむ秋の野の露とをかぬる我身と思へは

人の家の前栽のかれりけるを見て

堀河右大臣

女郎花もろけとみせは[illegible]

う色のをのこしも前栽かりも野も色にしまりけり

[illegible]

橘則長

をみなへしおほかる野へに[illegible]

読人不知

秋風にふきまかふ女郎花も[illegible]

前律師慶暹

天暦御時御屛風によめる

[illegible]をよめる

清原元輔

嵯峨の野にかりそめの女郎花[illegible]宿もかさなる人

毎家有秋といふ心を

今上御製

宿ことにしをれ野へをやうつしたる人のこゝろの世ぬ[illegible]

題不知　　源道済

よそにのみ見て過ゆく人はゆかし草花おもしなきは露よめりとも

あさかほをよめる　　和泉式部

ありとてもたのむへきかは世中をしらする物は朝かほの花

萩をよめる　　源道済

いとゝしくなかめらるゝ夕暮に秋とおほゆる風そ吹なる（けイ）

村上御時八月はかりうへひさしくわたらせ給はてしのひてわたらせ給ひけるをしらすかほにてきんをひき侍る

斎宮女御

さらてたにあやしきほとの夕暮に荻ふく風の音そきこゆる

堀河右大臣家にて哥合し侍りけるに萩風をよめる

讀人しらす

萩の葉に吹すきて行秋風の又たか里をおとろかすらん

資良朝臣とをさかりて侍りけるにつかはしける

三条小左近

音にこそなれし人は音もせて萩の上葉に風そ吹なる

こむといひて待ける夜まうてこさりけれは

備前典侍

秋風のすこしかりゆる萩しらてそらのそて待ける哉

荻の葉に人たのめなる風の音を我身にしめてあかしつるかな

花山院歌合せさせ給ひけるにしもつけのこまろを
まとゐしてよみ侍りける秋風をよめる

藤原長能

荻の風もやゝ吹そむる声すなりあはれ秋こそ深くなるらし

山里霧をよめる　大納言経信母

明ぬるか川瀬の霧のたえ〴〵にをちかた人の袖のみゆるは

六条左大臣家歌合によみ侍る

藤原顕衡

ゆふぐれの風のけしきは花すゝき招くかたにぞ秋はみえけし

野花をよみて侍るとき人々よみ侍りける

何となく心ぞとまる秋の野にいとゞもまねく花すゝきかな

源師賢朝臣

天暦御時御屏風に八月十五夜前栽ある人の家をよめる

清原元輔

ちらしおきてやすむらん我宿の花は盛の秋の見る人

かへりける人まで水色秋花をよめる

大中臣能宣朝臣

水まさる色も花のまがひにいとゞ移ろひて千世の秋のたねとぞみる

庭に秋の花をうゑはじめていひける

関白前右大臣

わか宿の梢の聲をとへらはちりて萩見よ世の人につけや
思野花といふこゝろをよめる
良暹法師
朝夕にたかふきさらは露まさるやかて萩ちるものゝなけれは
鶉なくしきよの家にて人に合し侍りけるに庭盡秋花
といふ心をよめる
源頼家朝臣
見る宿に植し萩の花をとへ人は麻の衣や野人のこゝろん
源兼實
わか庵に萩をうつし植て麻の衣を野人とかける
題しらす
良暹法師

さひしさに宿をたちいてゝ詠むれはいつくもおなし秋の夕暮
山里におるにはまかりて侍りけるに秋の比
みて侍れたよみ侍る
和泉式部
秋くれは人も来て見むいとしく物おもはしき物の山里

後拾遺和歌抄第五

秋下

永承四年内裏歌合に擣衣をよみ侍ける　中納言資綱

から衣ながき夜すがらうつ声に我さへねでもあかしつるかな

伊勢大輔

さ夜ふけて衣しでうつ声聞ばいそがぬ人もねられざりけり

藤原兼房朝臣

うたゝねに夜や更ぬらんから衣うつ声たかく成まさるなり

花山院歌よませ給けるによみ侍ける　藤原長能

ひとりしてながむる秋の夜はゝ月見る人のいねずぞありける

選子内親王秋ごろにこしはべりける時九月十日あまりの

ありあけ月ちかくなるまで人々あそびしけるにかきくもり

ゆくほどもなく雨ふりしかばしのびてよみ侍ける　斎院中務

月見しに秋風の音のさびしくて雨のはらゝに秋ぞかなしき

山家秋風といふことをよめる　大弐越前

山里のしづの松垣ひまをあらみいたくな吹そこがらしの風

題しらす　　　　　　　源道済

みるとせハ紅葉しぬらん山里にゆくへそ人ハひとりきにける

永承四年内裏歌合に

堀河右大臣

いかなれはおなし時雨に紅葉するはゝその杜のうすくこからん

宇治にて人々もみちを見てあそふ心をよみ侍ける

藤原経衡

日をへつゝふかくなりゆく紅葉の色にそ秋のほとはしらるゝ

長楽寺にほと見侍りける比人のもとよりもみちの山のさかりなる由

と申て侍けれはよめる

上東門院中将

さのハ来ぬにこそ紅葉して霧たちはけ旅のやまさと

屏風絵に車ならへて紅葉みる所をよみ侍る

藤原兼房朝臣

からにしきはなをも紅葉にはたかへてとおもふかな

紅葉をおもひこゝろを今はまた世にもみえつゝふかき

まつりける

右大弁通俊

いかにしてかくれの山のたつもみちハ秋はとまれとおもほえける

むかしの京にまかりて人のまかりてかくれ菊の

をよめる

恵慶法師

うちはへてちるしはなちくて菊の花をそかさしてもちる竹の

なる

中納言定頼の家にて人々あまた侍りけるに菊花によせ
て恋の心をよめる　大貳三位
つらからむかたこそあらめ君ならて誰にかみせむしら菊の花
上東門院菊合せさせ給けるに左のとうつかうまつ
るとてよめる　伊勢大輔
目もかれすみつゝくらさむしら菊の花よりのちの花しなけれは
藤原義忠朝臣
むらさきに深くそめたる菊の花うつろふ色と誰かいひけん
後冷泉院の御時后宮にて人々庭菊を
よませ給けるによめる　大蔵卿長房
朝まだき八重さく菊の九重にみえしは霜のおけるなりけり
菊をおりてあはせし所ありけるに人のもとへつかはしける
久しくみえされは待りけるをよめる
赤染衛門
きくにのみ心はうつる花の色を見にくる人もとまりやはせし
天暦御時御屏風に菊をもてあそふ家ある所を
清原元輔
うすくこく色そみえける菊の花つゆや心をわきておくらん
屏風絵に菊さきたる家にたちよる人ある所によめる
大中臣能宣朝臣

かりにこむ人のためにおける菊もうつろひそめて来まさぬにみん
いとしふ侍ける人のもとにおこすとてよみ侍ける
九月ばかりに菊のうつろひて侍るをみてよめる
良暹法師
白菊のうつろひゆくぞあはれなるかくしつゝこそ人もかれしか
はかなく人さむしろにわたりて後ちりまかり残る家にまかり
まかりけるにうつろひたる菊の侍けるをよめる
藤原経衡
うつろふを惜しむ人の心はしら菊もわがとこはうつろひにけり
五条なる所にて侍りけるにまさしくにはかに菊を
もそおかしかりけれとよめる
中納言定頼
我のみやうつろふとおもひし物を白菊もうつろひにけり
永承四年内裏歌合に残菊をよめる
中納言資綱
ひとゝせにうつろひのこる白菊を霜のおきけむ菊ともみるかな
寛仁二年八月入道前太政大臣大饗し侍りける屏
風に山里のもみち見に人きたる所をよめる
右大納言公任
山里のもみぢ見にとやおもふらんちりはてゝこそとふべかりけれ

屏風絵に山里におとこ女来て木の葉見て
あそふ所をよめる　　平兼盛

かへるさのみちやはまよふ紅葉ちる木のもとにては立とまるとも

山里にまかりてよみ侍ける　　清原元輔

紅葉ちるころなりけれは山里のことそともなく袖のぬるゝは

月前落葉といふ心を　　御製（今上イ）

こからしの風にふかるゝ紅葉ともあらそふ月の影そもれくる

落葉みちをかくすといふ心をよめる　　清原清成

紅葉ちる秋の山辺はしらかしの下はかりこそ道は見えけれ

式部卿のみこ大井におはしけるにまかりて紅葉をよみ
侍ける　　堀河右大臣

水上に紅葉なかれて大井川むらこに見ゆる滝のしらいと

大井川にまかりてよみ侍ける　　中納言定頼

みなもなくみえこそわたれ大井河峯の紅葉は雨とふれとも

永承四年内裏歌合によめる　　能因法師

あらし吹みむろの山のもみぢ葉は竜田の川の錦なりけり

題しらす　藤原範永朝臣

みる人もあまたなりしにしきの磯に秋をは時雨にまかせつるかな

後冷泉院御時后宮歌合によめる

伊勢大輔

稲の葉は山田の庵にいなつまのひかりさしこえてもとかけり

もろかたの朝臣梅津の山荘にまかりて田家秋風といふ

心をよめる

源頼家朝臣

宿ちかき山田のひたに手もかけてふく秋風にまかせてそみる

土御門右大臣家哥合に稲田をよめる

相模

秋の田になみよる稲は山川に水ひきうへし早苗なりけり

題不知

源頼綱朝臣

夕日さす裾野のすゝき片よりにまねくや秋をおくるなるらん

九月盡の日秋をおしむ心をよめる

藤原範永朝臣

わかるゝはいつも時雨れむ菅中に秋をおしむなかに

九月盡の日終夜秋をおしむ心をよみ侍ける

ゆくてハ秋をとゝめむ花すゝきまねく色ハ秋よりの浦

九月盡日よみ侍ける

秋たゝけふはかりそとなかむれは夕暮にさへなりにけるかな

法眼源賢

九月廿日伊勢大輔かもとにつかはしける

大貳資通

年つもる人こそいとゝおしまるれけふはかりなる秋の夕暮

九月晦夜によみ侍ける

源兼長

来をもすくるかりぬてことつてむなくさむかけてみゆる来秋のとまりは

後拾遺和歌抄第六

冬

十月のはしめつかたのことにや大井河にあそひて紅葉見侍けるによめる

前大納言公任

おちつもる紅葉をみれは大井河ゐせきに秋もとまるなりけり

十月つこもりかたに紅葉のちるをよめる

大僧正深覚

ちりかゝるもみちの錦は神無月しくれにいかにおりかけつらむ

承保三年十月今上みかりのついてに大井河に

紅葉せ之勝行くよませ給へる

御製

大井河ふるきなかれを尋ねきて嵐の山のもみちをそみる

かつらの山庄まて時雨のいたく降けれは道よりかへる

藤原兼房朝臣

おとはにもまさりて深き時雨かな人しこそしれ梢より

山里の時雨をよみ侍ける

永胤法師

神無月ふかくなりゆく木末よりしくれてわたる太山の里

落葉如雨といふ心をよめる

源頼実

木葉ちる宿はきゝわく事そなき時雨する夜も時雨せぬ夜も

藤原家経朝臣

紅葉ちる音は時雨の心ちして梢の空はくもらさりけり

十月ころ山里にまかりてよめる

能因法師

神無月ねさめにきけは山里のあらしの声は木葉なりけり

細代木に紅葉ニ條せよのいをハ錦をおりかけたれ

橋よしみちの朝臣

うちかへりておもふ心のこゆるをみをよる

中宮内侍

宇治川のはやくおもひしあらはれて網代にかゝる氷魚のすゝきかな

題しらす

藤原仲実

霧はれぬあやの河原に鳴千鳥声にや友のゆくかたをしる

永承四年内裏歌合に千鳥をよみ侍ける

堀川右大臣

佐保川の霧のあなたに鳴千鳥声は隔てぬ物にそありける

清輔

難波潟朝みつ塩にたつ千鳥浦つたひする声きこゆ也

題しらす

和泉式部

さゆる夜は板まをさえもたえしやはまれならぬ名の山里

冬夜月をよみ侍る

大弐三位

山の端は名のみなりけり見る人の心にそ入冬の夜の月

題不知

増基法師

冬の夜はいかにしてかは袖ぬれし衣ほしかねつゝ明しかねつゝ

よめる

民部卿長家

さ夜ふけて嵐にくもる冬の夜の月をかへりにあはれ世のかな

たつたをよめる　　能因法師
あらし吹三室の山のもみぢばはたつたの川のにしきなりけり
　　　　律師長せい
萩原も霜のまよにかれにける野はおもさへ深のつれなき
屏風絵に十月に女のもとに人をまちたる所
　　　　大中臣能宣朝臣
霜のまよ風寒のたびもおきまさるならむ人のまちかねつゝ
霜枯草をよめる
　　　　少輔
霜かれはひとつ色にぞ成にける千種にみえし野べにあらずや
霜落葉紅うにしもといふ題をよめる
　　　　読人しらず
おちつもる庭の木の葉を夜のほどにはらひにけりとみする朝霜
霰をよめる
　　　　大江公資朝臣
杉の板をまばらにふける閨の上におどろくばかり霰ふる也
山里霰をよめる
　　　　橘俊綱朝臣
ひとりゐる人もおとせぬ山里の宿はふかさぞ霰をそきく
永承四年内裏歌合によめる
　　　　さがみ
都にも初雪ふれば小野山のまきの炭竈たきまさるらん
うづみ火をよめる
　　　　素意法師

うたかたのあはれハ萬代まちてはかりける萬代も花とこそ見め
かめ殿の式部のみこ家にて松上雪といふ題を
人〻よみ侍りけるによめる
藤原国行
わか宿も松のうへなる雪ならハ色に出てや花と見えまし
たかつ孫の紀伊甲斐守にて下り侍りける時たちわかれけるに
つかはしける
紀伊式部
いつてかしのふる孫はわすれねと宿かるかたにしはしとまれ
山の雪見侍りてよめる
能因法師
紅葉ゆゑ出てこなかりけり小さ山の山のはつ雪ハ宿かりけり

題しらす　源道済
朝ほらけ雪ふる程の見えつるハ山の木末も霜月そのをけりけり
慶暹法師
出し夜も明ぬ次第に雪そふりつゝ今やとく人なき紛らん
藤原国房
伊勢のうみ雪あれたる志ほかまの煙も山のはによらん
摂宿雪といふ題によめる
津守国基
むかしおもふ草まくらにはさひしきに跡つけし雪とそ見る
屏風絵に雪ふりたる所に女の家のみなるかたある所を

よみける

春やくる人やとふともまたれけりけさ山里の雪をながめて　赤染衛門

道雅三位八条の家の障子に山里の雪ふりたる所を
よめる　藤原経衡

雪ふりてふみまよふべき山里は我よりさきに人こえざりけり

源頼家朝臣

山里は雪こそふかく成にけれとはでも年の暮にけるかな

法師になりていしやまに侍りけるころ雪のあした人のもとに
つかはしける　信寂法師

山里は雪も山路もふかくして跡たえにける人の行衛を

題しらず　和泉式部

雪つもるおのが年をばしらずして春をばあすと聞ぞうれしき

天暦御時の御屏風のうたに十二月雪ふる所をよめる　清原元輔

わが宿に降つむ雪は春にはまだき梅の花とこそ見れ

雪のあしたに大納言公任のもとにつかはしける　入道太政大臣

たにかくそ雪はけぬらん思へども君がたつちはまづぞこえぬる

雪ふりて侍りけるあしたむかしをおもひて侍りける　前大納言公任

如月の宵ハ年といふふそ春ははや過ゆきたく感し給ふ

霜をよめる　　増基法師

さ夜ハむしの音しけかりし霜さえて人しれすこそ冬はきにけり

題しらす　　快覚法師

さよふくるまゝに汀やこほるらんとほさかりゆく志賀の浦波

入道前太政大臣の障子の絵にあしろかきたる所をよみ

侍りける　　僧都長算

陸(ミチ)ノ奥へ秋の道にいきたりし時名取なるこやの池のこほりて見えけるを

題しらす　　曾禰のよしたゝ

岩間には氷のくさひうちてけり玉ゐし水も今はもりこす

氷遊半結　　藤原孝善

むはたまの夜を重ねてこほる京(?)池は春とも浪もたゝさ

後三条院東宮と申ける時殿上にて人々歳暮れぬるよ

しを詠侍りけるに　　藤原明衡朝臣

志あるみよかすらの身人は数ならぬ月日はかり(はかり)のかすのめる

十二月晦日ころに備前国より出羽弁のもとにつかはしける

しける　　源為善朝臣

数へは年といふふそかなしき人こそ老ぬる身こそなかりけれ

後拾遺和歌抄第七

賀 卅六首

天暦御時賀御屏風哥春立日 立春イ

源順

今日こそは[illegible]世の春にあふへき幾世を

入道摂政の賀志侍りける屏風にかゝれる橋の所を

平兼盛

松も生ひまたもこけむす橋はしら久しき事をみるそうれしき

おなし屏風にむさし野のかたかきたる所をよめる

武蔵野を霧のたえまにみわたせは行すゑとほき心地こそすれ

東三条院四十賀し侍りける屏風に子日して松ひく女車よりをりて小松ひく所をよめる

源兼隆 澄テ

霞さへあやしく野への松なれは君にそ君の千代はしらるれ

前大僧正明尊九十賀し侍りけるに宇治前太政大臣竹のはえつくりてきかせけるによみて侍ける

前律師慶暹

君をいのる年のひさしく成ぬれは老のさかゆく杖そうれしき

内裏御屏風に人の家に松鶴ある所を

平兼盛

嵐も梢もさそひて秋月の松と露とに夢をかさねて

屏風絵に海のほとりに松一本ある所を　源重之

一本と我書きしけれたありしき二葉の千世をみるまで

題しらす　読人しらす

君か代を何にたとへん常盤なる松のみとりも千世をこそまて

後一条院むまれさせ給ひて七夜に人々まいりて女房さかつき出して歌よみけるに

紫式部

めつらしきひかりさしそふさかつきはもちなからこそ千世もめくらめ

後朱雀院むまれさせ給ひて七夜によみ侍りける　前大納言公任

いとけなき衣の袖はせはくともこふの上をはなてつくしてん

題しらす　読人しらす

君か代はかきりもあらし長浜のまさこのかすはよみつくすとも

或人のいはく此歌七夜に中納言定頼かよめる

故東一条まむまれ給ひて御湯殿の前坊院生れさせ給

ひて内裏よりうふきぬおくりつかはしけるとて人々

よみ侍りけるに　右大臣顕房

遠も又千代のためしにひかるへき生そふ松の二葉なるらん

少将あつよし子むまれて侍ける七夜よみ侍る

清原元輔

ひめこ松大原山の千とせをはけふそむれし子の世にまかせてそみむ

道房朝臣むまれて侍けるにうふやしなひ侍りけるに

よとそよみ侍る

赤染衛門

雲の上にのほらむまても見てしかな鶴の毛衣年ふとも

おなしく七夜よみ侍ける

千代をいはふ心のうちに涼しきは君まて見えし家の風すゑ給

左大臣一親王生れ給ひにうふやにせさせける関白前の世にさき

おなしいまうちきみさはる事ありて御うふやしなひ侍

ける宇治前太政大臣下臈小侍従の時にかはりてよま

せ侍りける代にてよみ侍りける

右大臣

千年ふる二葉の松にかけてこそ藤の末葉も末白けれ

みこたちを冷泉院の御子にしてたてまつらせ給ける

花山院御製

おもふこと有はなれぬ枝松子の花さくらんかを見てこそ契りは

後三条院東宮にてまいられける時今上おさなくおはしまし

しまして けうの母女御の事なりて見さはりせ侍けれは

鏡を見んとてたまはせたりけるに小鏡給はりて　伊勢大輔

君か代はちりもくもらて萬世のかけをやとさむます鏡かな　閑院贈太政大臣

くもりなき鏡のひかりますますもてらさむ影にかくれさらめや

むかしこれはおほきおほいまうちきみを周防内侍見侍りて

かの御代のことなといひ出てよみ侍りける

ありしにつけても　藤三位

うき世にはよそにこれはしきしまの道をさへ

きみか代なからへてこれはさなからをいてこそく

ことよめといひつかはしけれはよめる　清原元輔

万代はかそへん物を紀の国のちいさき浜のまさこなりけり

人の悦こと侍るを聞てよめる

住吉のまつは紀の松はいかなけんそれとみえ

人のおさなき子のくに悦せかへりせ給

その海こせなまし侍きのみかけけるて　源重之

ゆくすゑもたのもしきかな小松原子の日の松もとし

大中臣のすけかたのみ侍りける内の戚の

ふてとけちのきん資俊卿のをみてよめる

菅原保昌朝臣

かくれむやの秋とはいへとふりゆく世をおもひきて道

三条院乃みこの宮と申ける時亭ちえ花のちん乃

哥合によみ侍ける

大江嘉言

君か代ハ千世にひとたひゐる塵の志らくもかゝる山となるまて

嘉暦二年内裏哥合によみ侍ける

民部卿経信

きみか世ハつきしとそおもふ神風や御裳濯川のすまむかきりハ

宇治前太政大臣家に三十講の後哥合志侍けるに

よめる

藤原為盛女　七十

おほしまや八十氏人の君かためひとつ心にいはふいのりを

永承四年内裏哥合に松をよめる

能因法師

春日山岩根乃松ハ君かため千とせのみかは万代そへむ

同哥合に読る

式部大輔資業

君か世ハしるしの杉ハ八千代ともなにかかきらむことはりなれハ

冷泉院よりはしめて代々世をしろしめしてあまたとしへたまひける

を以祝ひしてよませ給ひける

後冷泉院御製

岩くゞる瀧の白糸たえせねば久しき世々にたえてみえき

東三條院にて春宮まで行く池のうき草を

ちるは世に絶ぬるよに　小大君

春ごとにはしらぬ水もなかりけり汀のうき草へてぬよ

関白家に相撲いまうちまゐ人三条院御前にまゐりて

池のけふ時池のなかくとありよしと人ゝ後拾遺に

藤原範永朝臣

くもりなき鏡とみゆる池水の千代をこそまもれ影もゆりき

こゝには家の館ありて侍りける時の国の司にて侍けるを

まかり使にて藤花をりて侍りけるをみて

良暹法師

千世へん君がかざせる藤花ときはにかゝりてすゑ迄

後冷泉院御時大嘗會の屏風によみける国の名

やさしの小松樹多生

式部大輔資業

よろづ世に千代をかさねてみゆるかな松のみどりのみどりに

同御屏風大嶽山をよめる

うごきなき大嶽山をそこにて秋さまの世も久しかるべき

陽明門院にまかりてよりそへる世を侍りけるをきゝて

江侍従

むかし見し人をそ我はよそに見しとしもへぬれはとも河と思ふ覧

うらみられける

後拾遺和歌抄第八

別離

祭主輔親かいせへ下らんとしけるに野花山
紅葉なきはそれにかへむとすれとひてけるに
よめる　　恵慶法師

紅葉みんのちの春ともしらぬ身をかならす秋に我をはまたし

かへし　　祭主輔親

行しむへき秋のかみちもしらぬおもひに紅葉ちるとも

ゆかり下しの中へ下ることなくてのりしにまさるとしるよしもかれ

大家のはしめに書たりける

源道済

はのみすゝは行きて峯のもみちしを我かやとの人に見せはや

おほはまの雨のなとて京とはいはつの日より見ゆらん

増基法師

我かうの鶴とそいはなかなかの我もあはれ人とは道ちかは

遠江守為憲か下りけるに扇をつかはしけるによめる

藤原道信朝臣

まれにてもよにありし世のかよひちはかはらぬ春のことゝ見えなん

又あるとき小雨ふりけるにあふ坂のせきにて

源のなにかし朝臣のもとにはへりける

藤原雅叙

あふ坂の関うちこゆるほとはしらぬかくも我か人そ恋しき

あふまては人よかゝることおもひきつゝそ涙にて

藤原長能

よしのよりかなの道の掾にて侍りしや

三月尽にちくしへまかるとて藤原為正の子なとをしてたひ侍るに

きのふにはあかさりけれはしたのちかはらさりけるに

選子内親王

むかしいつきに侍りける

ゆく春をとめにいそくらんなとみゆるとはいはれけるさなかの花

藤原為正

かなし

祈つる世をとはけるなかにいきたる松をそおもひ出つる
人の心とやおもひまゐらせけるかな

藤原道信朝臣

さきの世をのかれはてぬる世中にすみわひておもひたつ人
入道摂政わたり給ける時大納言道綱の母のもとにつかはしける
きろに陸奥へまかり下られけるにつかはしける
すりに入て給ける

藤原伊宗 摂政イ

ありそのとその松たかきやまそのへまかりし名はかはらむ
かな

入道摂政

我をのみたのむといひしゆく末の松の世をもわすれしな

はるかなる下りて給りける家のあるしなりける
をとにつかはしける

堀河院御製

山のはに月影のこりてはれぬれはよそにみゆらし
源雅清朝臣みちのくにのかみにてくたり侍けるに
旅人くたり給ける家の雨よりいてまかりけれは

をとせける

清原元輔

たのめしの世をそむきやるまもなく君か松原
よしなれは末の松もまかりてつかはしける
いよはさは命ながらへゆく人の心かはらぬたのしみ
はるかなるにてかはせの国の下りて侍ける

法師よみ侍りける　大江よしとき

命あらはいまかへりこむ津の国の難波ほりえの蘆のうら葉に

橘則光みちのくにへ下りけるにいひつかはし侍りける

中納言定頼

こりそふる風によ道となりぬとも志ら河の関もゆるさしとそ思ふ

しけみちの朝臣十二月に法師になりていつくともなくまかりけれは

雪ふかきにわたりあけはなれて侍りけるに人のもとにいひつかはしける

さらぬたにむけ侍るなかをはるかなるにことゝなる見つゝ侍る

橘則長

わかれゆくはるの別をしらぬ身は八重たつ雲をあはれとそおもふ

はゝ人のもとへ下けり人に馬のはなむけし侍りて人々

さけのみなとしてひさしうあそひて歌よみくれ侍りける

たはふれ事のみなとしてひさしうおもひ給けり

慶範法師

遅れゐて我そかなしきかへりこむ程をまつへき命ならねは

法しにまかりて良暹法師のもとにいひつかはし侍りける

　読人しらす

わかれ路を中とひとかくとしつ﹅まくらにいまもなほさりとおもふかな

良暹法師

命あらは今ひとたひとおもへはや人こそとはねさりともと思ふ

能因法師いよの国に侍りけるに別をしみて

藤原家経朝臣

春は花秋は月にとちきりつゝ今日を別と思はさりけり

能因法師伊予の国より上りて又かへり下りけるに人々
馬のはなむけしてあけん春のわかれとおしみ侍れは

よめる

源兼長

おしへては春のめてにも花のはなれハ侍りてまされ

かたらふ人のみちの国に侍りけるに

源道済

都にハ生よと思ふ家ならもあれは風のはなは山も雨てこそ

能登へまかり下りけるに人々まうて来て年ころもあひ見ける
三河へまかりける道にいさ源中将にあひて侍ることなる
さかつきとりてさしける人にかはりて

中納言定頼

松山の松の浦風吹よせハ拾ひてしのへ恋わすれ貝

かへし

源兼澄

きえぬらむ忘れかひも拾ひては松のうらなみ

たちかへりねかふにまかりけるにあひける人に

かへりて

源よすえ

かくつゝ袖のしつくの人にこそ我もかくこそはおもひはべれ

おなしころ三条資朝臣蔵人にて下侍きゝたるにさとへ
のまかりけるによりて蔵人おもしけるとてつかはしける
源為善朝臣
さてやむへしとおもふにそ別ぬるかなやまなはあまつ空もすなと
あつまにて中納言の御ところに女房に申つかはして
それをきかて後すみ侍らぬにとしへにけるに世にたくひなくなれとお
もひはこよひこひしらるゝまていかにせよとてすみわたりつゝ
かへし
祭主輔親
をはすての山なれぬとも都なる人にしらるゝ月かけは侍らしやは
橘のみかはらはそふを忘てみるかのかみにて下侍ける

かへしにてつかはしける　赤染衛門
世の人もこまつのもとは都なれはおもひしるへき
ものおもひきかる女房いはらきにまかりて三条院をもしいへ
ついにけれは　中原頼成
いはらともしらぬなるをみはなれしかなしかへてこのみなとにへりえん
女ともはしくなしかまはしくて前よりまゐらせつきれて
そのかみもしらぬものあかしこになかれゆくにかへるみの
なかれせし中まてと思ひて侍るかとおもひてける
祭主輔親
かなしきは雲井のかせのみちをしもおもふによりてはなれしかな

はてゝまゐるときゝてむせひとあり

藤原節信

かゑりて、すき人にて能因にはしめてあひて、たかひに感し入て、ゐのちはしらす

はてしなきけふのかたみに人にしられぬ物まいらせむとて

なからよしあり

連敏法師

つくしへまかりけるにも鰹もこゝろにはなし、はけは波にうかひけり

いはひ入下りて能因法師のもとへつかはしける

大江正言

みやこの花をみやこにすみなれて八重ともいはゝ、はては人のゆく

寂照法師入唐せむとてつくしへまかり下りて七月

七日ふねにのり侍けるにつかはしける

前大納言公任

三川の入道すゝみて、ふかき恩をしるは、法をもとめぬ人にしな

入唐し侍るみちより退心のつきぬさきにとりけり

寂照法師

其かへりてかさねて橋の上にあひて、こゝろにまかせて、これかれ

成尋法師の、かへしには、きよくつとめのちのたのしみ

あさにいひつかはしける

見人かへし

住のえの見をかくさんとて雲井ともさためぬ旅の道を

後拾遺和歌抄第九

羇旅 旅 ○三十六首

石山にまうてける道にてはしり井にて清水を見侍て

堀河右大臣

あふ坂の関とはきけとはしり井の水をはえこそとゝめさりけれ

十月はかりにはつせをまうてゝ侍けるに三わたの末に霧

立たるを読侍る

前大納言公任

ゆく道のもみちの色もみるへきを霧とゝめつやいとひける人

うゑし

中納言定頼

雲わきていはれぬそらん紅葉々にかゝりてかはたてゆきすて

白雲はみちにかくれつゝまたいつかあはん逢坂の関に
わかれの悲しきことをいひける人にて

花山院御製（太上天皇ノ）

桜花ちるまて見つるとのみ思ひしものをいかに大概かなしき

熊野へまいりけるみちにて咲たる梅をみて

懐円法師（クワイヱン）

都にて咲たる梅を人にはいはでみつゝいくかへらん

金峯山へまいりけるみちにて月を見てよめる

少輔

山のはにさしのぼるなる月ゆゑに思ひしかはとゆくへもしらず

西にのぼりて侍りけるに東をこひ侍るとてよめる

藤原国行

こゝろそ西にゆく月の物を若しともよそにおもひしにかはりよ

津の国へまかりくだりけるに

能因法師

都にはこやの行かりに日は暮ぬれはちるらん（ゆく）物よ思ひて

ゆきつまへまかりしと思ふ道にて

増基法師

都のこひしかりつるに東路を越ゆるまゝに世をそむく

いたこに下侍りけるよそに言ふとおもふ心の侍る

きれハよみ侍りける　　　和泉式部

おもふことはありけれはまくのみやこ鳥都のことを我にきかせよ（まくらをとイ）

正月ころあふ見へまうて侍りけるにかゝ見山にて雪を見
てよ見侍りける　　　恵慶法師

鏡山こゆる宮こも春雨のくもりやハまさる人かけを見る

七月一日ころにたちいりて下けるに夕くれ見人に関山を
こゆとて志もつ東をさしてやとみ侍てよ見侍
りける　　　赤染衛門

あさまてハ秋もとほくやなりぬらん関乃夕風志るくふくらん

題不知　　　増基法師

すまえりかけ浪かへるあその山ハそれとしらねと
津の国に下侍りけるに宮こにいつかへるへくもしらす
をよ見侍りける　　　良暹法師

わかの尾たかゝ浦の小屋ゝりてこともよにゆる侍る山ふ
毎かうしの胡床巻はなちて下侍りけるにそのまゝと
いふところにいりゐて志のひてみさうしかへ屋すてよ見
侍りける　　　能因法師

志くれふる色もかはらぬ時のありの山のそよ見えしけるなん
あけまのかへまうて侍りける時にかくいふはふる　　　源重之

東路に[illegible]遠江には[illegible]
ちゝのともに遠江国に下て年へてのちしもつけ
の守にてのぼり侍りしに浜名の橋のもとにてよみ侍りける

大江ひろつねの朝臣

あつまちの浜名の橋をきてみれはむかしこひしきわたりなりけり
[illegible]かくよみ侍ける

能因法師

[illegible]人ありと[illegible]しのすゝ[illegible]けり
みちのくにまかりけるに白河の関にてよみ侍ける
都をは霞とゝもにたちしかと秋風そふく白川の関

出羽国にまかりてきさかたといふ所にてよめる
世中はかくてもへけりきさかたのあまのとまやをわか宿にして
津の国へ下けるに道にて淀の渡りにてよみ侍ける

大中臣能宣朝臣

すさきなる[illegible]のかけとゝめて[illegible]
[illegible]も下けのゝ[illegible]をみてよめる

大弐高遠

風吹は[illegible]のさいたみやそれなくにたゝ
書写の聖（聖人）にあひにまかりて播磨の国におはしけるに
てかへりことに明石の月をみて読人よみて

太上天皇イ
花山院御製

月影も梢の見えてうつろふをしら代紀のこゝろしてあそふ
ちり海のおもしろさに西にとまりゆくふかきふりて
月おもしろき夜中きみの大盤所にたてまつり給ける

中納言資綱

おほかたの秋の空やいかならんしらいりの月をみる我ふしも
なし

紀武紀

なかむれはかの浦風さむきにやこの月はふけにしかは
ひさしくも下けるそて月のおもくおもかはりしける

やまとの守の母

月はかく雲井なれともみしものを秋はかはらてかへりかは
宮作のはるかいまにもたてまつりしてあさむそて海の上
みの月を待としのゝめまても見給けり

橘なかよし朝臣

秋のよく山のはみえて月影をおもふはしは浪の上にそこそなく
はての
ほかにはまゐりて月はおもかりきの秋よ給へ
（傍書：はのおイ）

藤原くにゆき

み尾にかく雲のゐてふかきてはもれも秋の夜まて月はしつかに
まくもまきかり行く道にかくよき給けり

西宮前左大臣

七日のよもあまりにいくらもたちかへりけるよにたちかへり侍ける

つくしに下侍けるに明石といふ所にてよみ侍ける

帥前内大臣

物おもふ心のやみしくらければあかしの浦もかひなかりけり

いまものゝ(?)ふ(?)へ(?)まかり侍ける道にてよみ侍ける

中納言隆家

はるもきは紀のふるさとの世にありてこそ秋をまちけれ

伊予国よりのぼる十二月十日比舟にのりていそぎのぼりけるに

武蔵守資業

いそぎつゝ舟出ぞしつる年のうちに花のみやこの春にあふべく

つくしより上ける道にさやかた山といふ所をすぐとて

讀侍ける

右大弁通俊

あなし吹せとの塩あひに舟出してはやくぞすぐるさやかた山を

越後よりのぼりけるにをばすて山の麓にて月

のあかゝりければ

橘為仲朝臣

こゝや此山月みるらんといひおきし嵐の光もなをあはれなり

筑前の守に下り侍りけるみちにてよめる

源道済

思ひ出はきたらむ里を惜しめどもすみなれの山をかくれてぞゆく

たえしみちなく

さ夜深く嵐吹しやいかならん汀の浪に思ひさはなの　なる

後拾遺和歌抄第十

哀傷

一条院御時皇后宮かくれ給てのち帳のかたひらのひもにむすひつけられたる文を見つけたりけれは内にもみせ奉れとおほしかほにて歌三つかきつけられたりける中に

夜もすからちきりし事を忘れすはこひん涙の色そゆかしき

しる人もなき別路に今はとて心ほそくもいそきたつ

物いふ女の侍りける前にまかりけるに人なくみなかき

といひ侍りける返事に

源兼長

ありしこそかきりなりけれあふことをなとのちの世とちきらさりけむ

山寺にこもりて侍りけるに人をとかくするかみえ侍りけれ
はよめる　　　　和泉式部

たちのほるけふりにつけておもふかないつまた我を人のかくみむ

三條院の皇太后宮かくれ給ひてさうそうの夜月
のあかく侍りけるによめる　　　命婦乳母

なとてかく雲かくれけんかくはかりのとかにすめる月もある世に

円融院法皇かくれさせ給ひてむらさき野に御さう
そう侍りけるに一とせ此院子日せさせ給ひし事なと
おもひ出てよみ侍りける　　　左大将朝光

むらさきの雲にかけてもおもひきや春のかすみになしてみむとは

大納言行成

をくれしと常のみゆきはいそきしを煙にそはぬたひのかなしさ

長保二年十二月に皇后宮うせさせ給ひてさうそう
の夜雪ふりて侍りけれはつかはしける

一條院御製

野へまてに心はかりはかよへとも我みゆきとはしらすやあるらん

入道前太政大臣のさうそうの朝に人々まかり
かへりに雪のふりて侍りけれはよみ侍りける

法橋忠命

さく花につきゝ雲はしきりのるへ八重の霧のたえまより見えはしれ

入道一品宮に花折て侍けるに梅かえにさして

同法の兄のもとにつかはしける

小侍従命婦

をちこちのかりきれなりとえかたらの色に紅葉の露にほひこそのかなしき

二月ばかりに春風のやまおろしのかみよりきむかりもえたまはり給ける時

の同法の見へけるもと給はりける

いさ又君をしるへにはこの世もつきぬとみるかなき

かし

さかへ

みすしもあつきはなかれはあやまたぬ君のためにはいさしらせ

三條院御時皇太后宮に女房にさぶらひける時人々

つかうまつりける人のかゝせさせ給ふ人々ありけれは

たゝしきさまにはいはせさせ侍てつかはしける

山田中務

我をこそ玉ぬきとめてかはらぬはあたし秋やあきのたのみ

たゝこれはるかに侍ける人のもとにつかはしける

相模

こはやとおもひし人のこゝろなく露けさにいはそれ君の袖はくちぬらめや

なし

大和宣旨

涙川なかるゝみおとしらねはや袖はかりをは人のせくらん

後一条院御時中宮九月ばかりにまかでさせ給ひて後朱雀
院の御時又この中宮八月ばかり里にいでさせ給へれ
ばむかしの事を侍るいかゞおぼえけんにつかうまつりける

故中宮内侍も

いかばかり恋しけくれ秋をすぐさむみ時ぞしのばるゝ

左兵衛督経任にて侍りける時つかさを給はりけるにぞ

わづらふ事ありけるひきかへせんとて師賢朝臣にこそあり

て侍りけるがもとにつかはしける

小左近

よそにのみきく袖も露をかはしつゝ本のよそのならはしをこそまつ

霊山にまうでゝ侍りける人のもとにかへりまうで来けるに

月あかゝりて又九月十三日にのぼらむとすと聞きて侍る

能因法師

まかりにしとせの人はかけけんも宿にて見るらんこよひの月ろ

右兵衛督経俊女にまかれてほどけなく侍りけるはらからに

おくれ侍りけるところに

はつかなる

侍りけるはらからに人のもとに紅葉をつかはすとて

右大臣北方

なやたのみありて山寺に侍りける人のもとにつかはしける

読人しらず

山てらの杉の紅葉ちりにけり木のもとにいとゞ時雨ふりつゝ

出羽弁かおやにおくれて侍けるをきゝて身をつめはいと
あはれなる事なといひけるをきゝてよみ侍ける

前大納言隆国

なけくらん人のなけきをきゝてこそ身のうさまてもかはらさりけれ
なし

出羽弁

つゐのさしはやまにはよみをかしきを好しく別道を我身の忘れ
ひとへに

高階成棟ちくしにくたれりけるときゝてつかはしける

中宮内侍

わかれゆく人をまちてぬるよをむかしもあまたに花はいひ毎よ
清原元輔かもとにつかはしける身をはかりきえなんとか

たく岩まよりいつるかはひのひとつとせ
ことしはみえつ

源順

よにふれはそこはかとなくあはれなる人の世のうきはたゝならぬ
橘則長ちくしにくたりけるときゝてつかはしける人かもとに
つかはしける

橘季通

おもひやるこゝろはかりもかきりなく別ぬるよの後わかれなり
後冷泉院時宮の内侍にて侍りける母下てなりける
程の心よりきこえて上東門院の人こゝせなき
なかころの御心にまかせるへき

武部命婦

なをし道のほそてわたりし風さにはきえぬらん心つくしは

後三条院位よりおりさせ給ひてその比御なやみおもく

ならせ給ひて六月一日まうでけるに雨のふり侍り

これは先帝の御事なとおもひいてゝよみ侍りける

きこえける

周防内侍

五月雨にあらぬけふさへ晴れせぬはそらもかなしきことやしるらん

二条前太政大臣のめなくなりて後ひとりのこりたる髪

をみてよみ侍る

中納言定頼母

あさましくおつとおもひしむしの玉のみそのこる哀なれ

子にをくれて侍りけるころ夢に見えて侍りける

藤原實方朝臣

うたゝねのこの世の夢のはかなきにさめぬやかての命ともかな

父のみまかりにけるのち夢にみえけれは

藤原相如女子

夢みぬとなけきし人を程もなく又わか夢にみぬそかなしき

此哥は粟田右大臣身まかりてのちかの家にちゝ

のゆかりありて侍けるに夢にみえさりけれは

なけきけるをきゝてよみ侍りけるに又ほとなく

身まかりにけれはなけきてよみ侍りける

物いひ侍ける女なくなり侍りけれは女
のおやのもとにつかはしける

藤原実方朝臣

契ありてこの世に又は生るとも面かはりして見もや忘れむ

一条摂政身まかりてのちわさの事ともはてゝ人〳〵
ちり〳〵にまかり侍けるに

少将藤原義孝

夕まくれこしけき庭をなかめつゝ木の葉とゝもにおつる涙か

小式部内侍なくなりてむまことものはへりけるを見てよみ
侍ける

和泉式部

とゝめおきて誰をあはれと思ふらむ子はまさるらむ子はまさりけり

一条院うせ給ひてのちなてしこの花の侍けるを
後一条院おさなくおはしましてなに心もしらてと
らせ給けれはおほしいつる事やありけむ

上東門院

みるまゝに露そこほるゝおくれにし心もしらぬなてしこの花

道信朝臣ともろともに紅葉みむと契侍けるに
かの人身まかりての秋よみ侍ける

藤原実方朝臣

見むといひし人ははかなくきえにしをひとり露けき秋の花かな

五月の五日をさなき女におくれて侍けるにあやめを
のさかりに日よみ侍ける
大江匡衡朝臣
別れしはかなさみたれぬる衣も常よりまさりてしほれけれ
かの中に侍ける頃中京に侍りけるはやなくなりにを
まいらせんとてのかりて山さとに侍けるを思ひわひを
て読侍ける
大江嘉言
宮のうちにいつも秋にのみまつ見し人もなくなりにけり
敦道親王におくれてよみ侍ける
和泉式部

今はたゝそよそのことゝおもひいてゝ忘るはかりのうき事もかな
おなしころ尼にならんとおもひてよみ侍ける
捨はてんとおもふさへこそかなしけれ君になれにし我身とおもへは
十二月のつこもりの夜よみ侍ける
なき人のくる夜ときけと君もなし我すむやとや玉なきの里
右大将みちふさ身まかりてのちてならひ侍りける扇
うらにくものいひさしたる紙をみてよみ侍ける
土御門右大臣女 母イ
別れにし人をくやしくおもふかなくもはかなくふれこそ
はてしもなきものかなしくなりゆく人を

思ひ出てくよそに侍らん

大貳高遠

あらしさにぬる秋はけるとし暮にもえさきとには暮とこそ

越前朝臣めなくなりてのち越前になりてはべりけるみまし

下りけるに装束給はせてよみ侍りける

源道成朝臣

さしてゆくあとしたふかたまのきしと思ふ旅の空よ

かはらぬなくなりてあとまでたる事なとゝけ給て

とのやうの一日秋香をちらさぬにふみくせうこの

むかしのちかのはのてふきけるとしけの

選子内親王

法のさかりにはる花をかすくありさま世のかはりとそ思ふ

なに思ふ人ありけるあとにおとこなくなりて侍りけるにすゑのみち

いたはしき人のかはりてもとめのかたよりつかはしける

伊勢大輔

かさねきし春のたもとはさはかりの涙もなかりしをにはれたるに

服まで侍りける十月一日あふ法をなかめの秋の空

なかのすゑとふせてとひけるとて侍りけるにはよめる

康資王母

君のみや花のなをしたちかへて毎秋の露はなかりし姉なる

赤染まさひらかもとへまかりける五月五日にかく
侍りける　　　　　　　　みまさかの三位

すみ染のそてはいとゝこひちにてあやめの草の根やかけけん

後朱雀院うせさせ給ひて又のとしの
年の時なりやまひも内にまゐりたりけるに三位
のはしめにうちにまゐりてつたへたりけれは法師のまねを
まねしてうちてさし入させ給へる

一条院御製

こゝのへにかよふ人と根をたつねてもなにやさかへる君の袖
後冷泉院くらゐにつかせ給ひはしめ(に)冬(に)しまゐらいて

何(か)又のとし秋東三条のつほねにて女房あまた
侍りける所にたちよりて御まへにてさくらはつけれは

麗景殿前女御

秋ちらむも(の)そこはけさ萩のうへにこそ身をしたかね
成頼けるを女房(の)たちうへにてみれは　　待(たる)を

伊勢大輔

別ぬるその日はかりはいつもゆきていさこふらぬ人そうらやましき
ものゝくにすみ侍ける女とをくまかりて又のとしそのかみ
わかれけるきはにつかはしける

紀時文

年をへてすみこし人もかはりけり秋はこのよもあきにけるかな

かへし　　　　　清原元輔

別をしむをしむとくるてなみだにはこれ秋のよもをしみきる

後一条院御時皇太后宮より世をのかれて後わさに
ゆかりあるところありて帰りきしにかのみやより時をは
かくさへしてみしかとてひかりをよせ侍けるかへしに

江侍従

昔見しわがみのつらきよはにとおもはかへさしとおもはさりける

ちかくなくなり侍ける月よめる

平棟仲

こひしさにかくて見し人もなきよになかるる墨染の衣よりこそ人もまさりけめ

平兼盛

うすくこく衣の色はかはれどもおなじ涙のかかる袖かな

ふくぬぎ侍けるによめる

藤原定頼朝臣

墨なるかと見し人もみな藤衣ぬぎすてたれはなみだのみこそ

十月はかり物へまゐり侍りけるみちに一条院をとほりて
車を引入て見侍けれはひさしく荒たるさま侍けれは
見てよめる

赤染衛門

きえはてて人もなきよの庭とみえてあはれにおもほえしかな

菩提樹院に後一条院の御影をかきたるをみて
人々まいりけるに思ひ出てよみ侍ける

出羽弁

いかにしてうつしとめけむ雲ゐにてあかずかくれし月のひかりを

上東門院よをそむき給ひて石山にまゐり侍けるにあさ
らかに家ハいきうまいりて侍けるにこの世そむき
たやすくまゐりて二たびあかくなりて侍りしと申しける
文よみける

赤染衛門

[illegible]まゝにこゝは難波の宿ハ又きかむ
海邊にまうで侍けるに小一条院のかよひ給ひき所

難波といふ所にまかりてむかしを思ひ出てよめる

源信宗朝臣

あし人よあはれの事ハかたるねと難波のなにはとしハむかしなり
かくよミて侍ける紙に書付てのちに信宗朝臣の
わすれ侍りにしを

伊勢大輔

なにしおはゞあはれと見えし難波の浦の道の[illegible]
秋の比ひとりまかりけるに人と思ひ出てよめる

源重之

年をへてむかしハ知らぬ世なれども[illegible]

しのふる事ありしものをわすれはつるつ程ありけりなといふ
此哥は義孝少将よみ給へるにおもしろくありともしるへ
しまて後よ見人たちそんといひて此紫哥よみ給ひて
猶ある男侍りてみかりしてかくときれぬる
我ちの墓よみ見給けり哥なり
時雨とは千くさの花そちり侍るに紅葉の袖ぬらさん
此哥男侍りてみかくあはれなるの秋は紅葉
よ少将らしたくらうそみえ給けりの
きて我の袖もかきぬよわすれし秋よりさかりに時
此哥らしなかりまとひ給ひくみか十月より小侍従
の墓にまかりけるにて筆をとりてみつ経のはしをた
まつ消えなん給ふはものかくそらうちろかとおもふよ
けれてえいふにていひ侍けれは此哥をかきとめて
かくよめりとなんいひ伝へ侍る
あふこと絶ゑぬ薫物ことに出まして二夏ちかくすきていとあはれなる
此人いとく此哥はたゝかに女のもとへまかり男侍りに小宰相
たとへふむすめの墓にまいりける女よませて
よみ侍りける　むすめみまかりて侍りけるよみ人
むすめあかの女のもとに小屋をとてよみ侍りける
読人志らす

なくても君はつかはれける人の又の名有けれは海辺
女いとしく見えて此事ふかく侍也
されはその川瀬をみちなる色なく我もて中々にいと海かしれ